

森 町

^{ぼん} ^{ない} ^{がわ}
本 内 川 右 岸 遺 跡

—北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

森 町

ぼん ない がわ
本 内 川 右 岸 遺 跡

—北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴って財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成13年度に実施した森町本内川右岸遺跡^{ぼんないがわうがんにせき}の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は第1調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の執筆・編集は中田裕香が行った。
4. 現地調査の写真は立田 理、中田が撮影し、室内での遺物の撮影は第1調査部第1調査課課長の立川トマスが行った。
5. 石器の石質鑑定は、第1調査部第1調査課主査の花岡正光から指導を受けて中田が行った。
6. 土器・石器の実測・トレースは木下はるみが行った。
7. 報告書の刊行後、出土資料および記録類は森町教育委員会が保管する。
8. 調査にあたっては、下記の諸機関・諸氏にご指導・ご協力をいただいた（順不同、敬称略）。

北海道教育庁文化課、森町教育委員会、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町教育委員会 藤田 登・横山英介・佐藤 稔・荻野幸男・渡部明美、八雲町郷土資料館 三浦孝一・柴田信一・安西雅希・吉田 力、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田裕二・小林 貢、南茅部町埋蔵文化財調査団 坪井睦美・輪島慎二、七飯町教育委員会 石本省三、市立函館博物館五稜郭分館 佐藤智雄、木古内町教育委員会 鈴木正語・菅野文二・三上英則・大矢内愛史・木元 豊、福島町教育委員会 山田 央、苫小牧市博物館 赤石慎三

凡 例

1. 本文中および図、表中では以下の記号を用い、確認順に番号をつけた。

P：土壌

2. 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺 構	1：40	遺物出土状況	1：20
復原土器	1：3	土器拓影	1：3
剥片石器	1：2	石 斧	1：2
礫 石 器	1：3		

3. 遺物写真図版の縮尺は、土器片が3分の1、剥片石器と石斧が2分の1、礫石器は3分の1である。ただし、礫石器には4分の1にしたものが一部にある。復原した土器については任意である。
4. 遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位m）を表している。
5. 遺構の規模は以下のように示した。単位はcmである。一部破壊されているものは現存の長さ等を（ ）で示した。

確認面での長軸の長さ×短軸の長さ／床面での長軸の長さ×短軸の長さ／最大の深さ

6. 土層の表記は基本土層をローマ数字、遺構の覆土をアラビア数字で表した。
7. 土層の説明には『新版標準土色帖1998年版』を使用した。
8. 石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で示した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。破損しているものは、その数値を（ ）に入れて示した。遺物実測図中でたたき痕はV—V、すり痕は← →で範囲を表した。

目 次

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	1
4 調査の方法	3
(1) 発掘区の設定	3
(2) 発掘調査の方法	4
(3) 整理の方法	4
5 基本層序	5
6 遺物の分類	5
(1) 土器	5
(2) 石器等	5
7 調査の概要	8

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境	9
2 周辺の遺跡	12

III 遺構と遺構出土の遺物

1 概要	13
2 土壇	13

IV 包含層出土の遺物

1 概要	19
2 土器	19
3 石器等	23

V まとめ

1 遺構について	33
2 土器について	33

引用・参考文献	35
---------------	----

写真図版

報告書抄録

挿図目次

I 調査の概要		図Ⅲ-2 P-2出土の石器	15
図I-1 遺跡の位置	2	図Ⅲ-3 土壌(P-3)	16
図I-2 調査範囲と周辺の地形	3	図Ⅲ-4 P-3出土の土器	17
図I-3 発掘区設定図	4		
図I-4 土層断面(1)	6	IV 包含層出土の遺物	
図I-5 土層断面(2)	7	図IV-1 包含層出土の土器	20
図I-6 遺構位置図	8	図IV-2 包含層出土土器の分布(1)	21
		図IV-3 包含層出土土器の分布(2)	22
II 遺跡の位置と環境		図IV-4 包含層出土の石器(1)	25
図II-1 遺跡周辺の旧地形図	10	図IV-5 包含層出土の石器(2)	26
図II-2 周辺の遺跡	11	図IV-6 包含層出土の石器(3)	27
		図IV-7 包含層出土の石器(4)	28
III 遺構と遺構出土の遺物		図IV-8 包含層出土石器の分布(1)	29
図Ⅲ-1 土壌(P-1・2)	14	図IV-9 包含層出土石器の分布(2)	30

表目次

I 調査の概要		表Ⅲ-1 遺構一覧	18
表I-1 出土遺物一覧	8	表Ⅲ-2 P-2出土掲載石器一覧	18
		表Ⅲ-3 P-3出土復原土器一覧	18
II 遺跡の位置と環境		IV 包含層出土の遺物	
表II-1 八雲町内の遺跡	11	表IV-1 包含層出土復原土器一覧	31
表II-2 森町内の遺跡	11	表IV-2 包含層出土拓本掲載土器一覧	31
		表IV-3 包含層出土掲載石器一覧	32
III 遺構と遺構出土の遺物			

図版目次

- | | | | | | |
|------|---|-------------------|------|---|------------------------|
| 図版 1 | 1 | 遺跡遠景(東から) | 図版 5 | 1 | P-2 出土の石器(図Ⅲ-2) |
| | 2 | 沢跡調査状況(西から) | | 2 | P-3 出土の土器(図Ⅲ-4-1) |
| | 3 | 南西の沢跡調査状況(南東から) | 図版 6 | 1 | J-26 遺物出土状況(東から) |
| 図版 2 | 1 | 南側の沢跡検出状況(西から) | | 2 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-1-3 胴部) |
| | 2 | 25ライン以南の調査状況(北から) | | 3 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-1-3 底部) |
| 図版 3 | 1 | 基本土層(南西から) | | 4 | H-33・I-33 遺物出土状況(南西から) |
| | 2 | 南側調査終了状況(西から) | | 5 | I-34 遺物出土状況(東から) |
| | 3 | 北側調査終了状況(東から) | | 6 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-1-5) |
| 図版 4 | 1 | P-1 土層断面(北から) | 図版 7 | 1 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-1) |
| | 2 | P-1 (南から) | | 2 | 包含層出土の石器(1)(図Ⅳ-4) |
| | 3 | P-2 遺物出土状況(東から) | 図版 8 | 1 | 包含層出土の石器(2)(図Ⅳ-5・6) |
| | 4 | P-2 (東から) | 図版 9 | 1 | 包含層出土の石器(3)(図Ⅳ-6・7) |
| | 5 | P-3 (西から) | | | |
| | 6 | P-3 遺物出土状況(南西から) | | | |

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

受託期間：平成13年4月1日～平成15年3月31日

調査期間：平成13年9月3日～平成15年3月31日

（発掘調査期間 平成13年9月3日～平成13年10月26日）

（整理事業期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日）

遺跡名：本内川右岸遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-15-7）

所在地：茅部郡森町字石倉町610-7ほか

調査面積：2,746㎡

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

（平成13年度）

理事長 大澤 満

専務理事 宮崎 勝

常務理事 木村尚俊（第1調査部長を兼務 平成13年7月逝去）

総務部長 柳瀬茂樹

第2調査部長 大沼忠春（第1調査部長を兼務 平成13年7月から）

第1調査部第4調査課 課長 遠藤香澄

主任 中田裕香（発掘担当者）

文化財保護主事 立田 理（発掘担当者）

（平成14年度）

理事長 大澤 満（平成14年6月まで）

森重楯一（平成14年7月から）

専務理事 宮崎 勝

常務理事 畑 宏明（第1調査部長を兼務）

総務部長 下村一久

第1調査部長 畑 宏明

第1調査部第4調査課 課長 遠藤香澄

主任 中田裕香

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄間）は函館市を起点として室蘭・苫小牧・札幌の各市を經由し、名寄市に至る総延長488kmの路線である。国縫IC～和寒IC間は既に供用され、七飯～長万部間については平成5年11月から建設が進められている。



図 I - 1 遺跡の位置

(この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「落部」「濁川」を複製したものである)

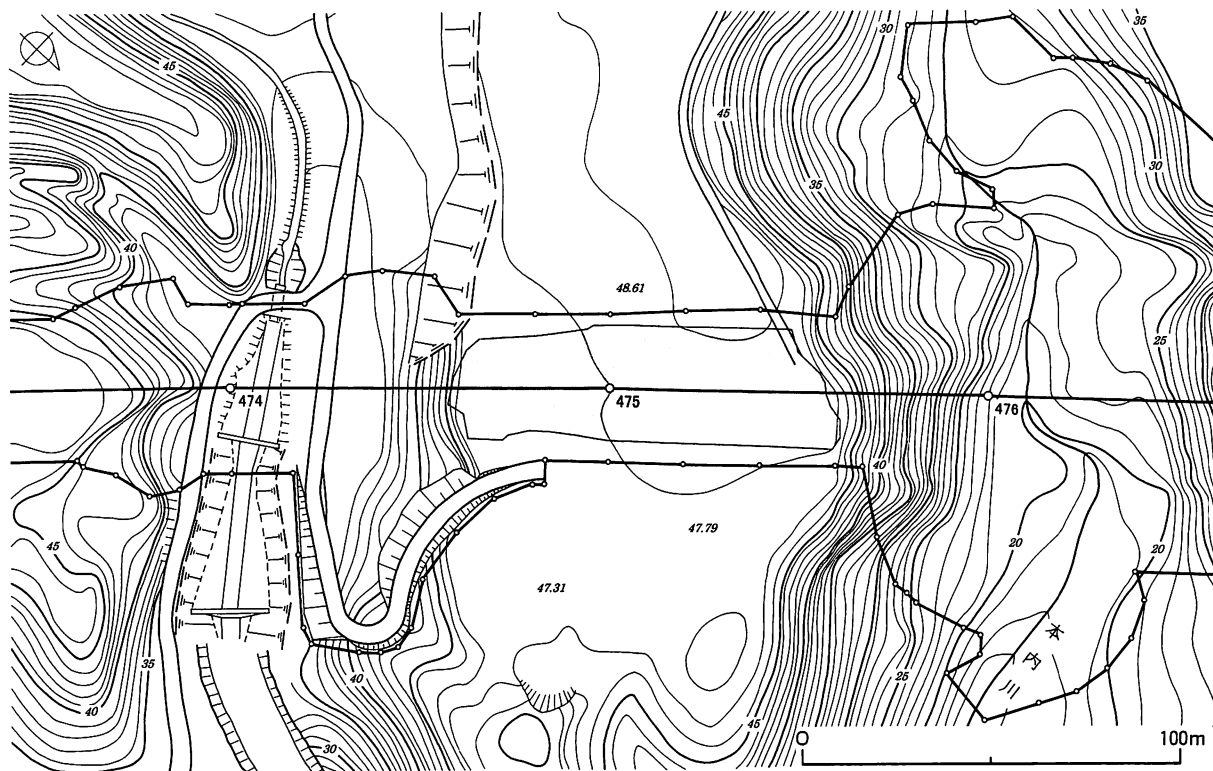


図 I - 2 調査範囲と周辺の地形

平成2年4月、日本道路公団北海道支社から事業区間の埋蔵文化財調査に関して事前協議が提出され、協議を受けた北海道教育委員会生涯学習部文化課では平成2年4月と平成7年11月に所在確認調査を、平成7年10月以降に試掘による範囲確認調査を実施している。函館工事事務所の管内に所在する本内川右岸遺跡では、平成8年4月と同12年11月に文化課によって試掘調査が実施され、発掘調査を必要とする面積3,400㎡が提示された。当該地域における路線の変更は不可能なことから、当センターが発掘調査を実施することになった。当初、現地調査は平成13年度・14年度の2ヶ年で実施の予定だったが、工事計画が変更されたため、現地調査を平成13年度中に終了させ、整理作業は平成14年度に行うことになった。

4 調査の方法

(1) 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）石倉地区平面図（縮尺1,000分の1）を使用した（図 I - 2）。基準のMラインは工事区の予定中央線上の中心杭であるS T A. 474と476を結んだ線を用いて設定し、Mラインから4 mごとに南西に向かってL、K…とアルファベットを廻り、北東側は同様にN、O…とした。また、S T A. 475を通過してMラインに直交する線を30ラインとして、4 mごとに南東に向かって29、28…、同様に北西に向かって31、32…とした。発掘区内ではこれらの直線が交差する地点に杭を打設した。発掘区はこの4 mの方眼を基本として、その南側（図左上）の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される（たとえば、L-25など）。調査時にはこの方眼をさらに4つに分けた2 m方眼の小発掘区に分割し、遺物の取り上げを行う際の単位にした。2 m方眼は杭のある側から反時計回りにa、b、c、dとし、L-25-aのように呼称した（図 I - 3）。

I 調査の概要

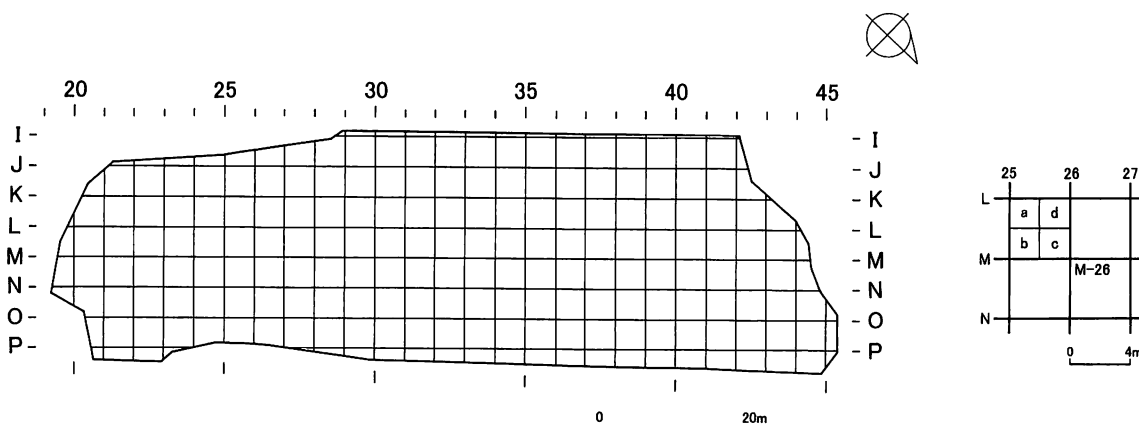


図 I - 3 発掘区設定図

なお、MラインはN-43.5°-W、また、この方眼の平面直角座標系は第XI系で、座標値は以下のとおりである（旧測量法、旧日本測地系による）。

STA. 474 X=-203,872.8759、Y=17,497.8608

STA. 476 X=-203,725.4875、Y=17,362.6833

(2) 発掘調査の方法

試掘調査の結果、包含層は発掘区の中央部では農地の造成や土取りによって削平されているが、北側と南西から南側には残存すること、南側では厚さ1~1.5mの盛土や駒ヶ岳を給源とする厚さ約50cmの火山灰が包含層の上に堆積していることが明らかになったので、本調査に先立って重機を使用して、耕作土・盛土・火山灰の除去を行った。

包含層の残存している部分では、移植ごてや手ぐわを用いて5cmずつ掘り下げ、小発掘区ごとに遺物を取り上げた。包含層の削平された部分ではジョレンを用いて遺構の有無を精査したが、遺構は検出されなかった。

工事計画は切土であり、脆弱な耕作土・盛土や駒ヶ岳の火山灰を垂直に掘り下げた場合、法面の崩落する恐れがあった。このため、調査範囲の外形は掘りはじめた時の範囲から120%斜め内側に傾斜をつけて掘開することにした。たとえば、現地表面から最終面まで深さ1mならば、最終面では調査範囲が1.2m内側に狭まることになる。調査終了後に行った求積では、調査面積は2,746㎡であった。

(3) 整理の方法

現地では、遺物を取り上げ後に水洗、分類、遺物カード・台帳の作製、注記を行った。

遺物への注記は以下のとおりである。

遺構出土の遺物

遺跡名	遺構名	遺物番号	層位
ボンナイ	P-3.	1.	フク土

包含層出土の遺物

遺跡名	調査区	遺物番号	層位
ボンナイ	J-26-c.	1.	Ⅲ

江別市の整理事業所では、記録類の整理・製図、台帳の補正、集計、遺物の接合・復原・実測・製図を行った。土器は、復原個体については実測図を作成した。破片資料はおおよその文様構成や器形のはわかるものを抽出し、拓影と断面図によって示した。写真撮影は挿図に掲載したすべての資料に対

して行った。整理作業終了後は、報告書に掲載した遺物と未掲載の遺物を分けて収納した。

5 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである（図 I-4・5）。

I 層：耕作土

I' 層：盛土 調査区南側の沢跡や東側のロームまで削平された部分を埋めていた土で、沢跡での厚さは約1.5mである。

II 層：駒ヶ岳火山灰 d 層（Ko-d） 降下年代は1640年である。

III a 層：灰黄褐色土 砂質である。窪地では下位に白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm）がレンズ状に堆積する場合がある。

III b 層：黒色土

III c 層：黒褐色土 調査区の北側に堆積していた。

IV a 層：暗褐色土～明褐色土 駒ヶ岳火山灰 g 層（Ko-g）がところどころに混じる。

IV b 層：漸移層

V 層：黄褐色ローム

VI 層：明黄褐色土 砂質で礫を多量に含む。

VII 層：濁川火山灰（Ng） 約12,000年前の濁川カルデラの噴火による堆積物である。

これらのうち、遺物包含層はIII b層～IV a層である。なお、III b層から出土した遺物にはIII層と注記している。

6 遺物の分類

(1) 土器

土器は、縄文時代早期に属するものをI群、以下、前期をII群、中期をIII群、後期をIV群、晩期をV群とした。続縄文時代のものはVI群、擦文時代のものはVII群である。ただし、今回の調査ではI群、VI群の資料は出土していない。II～IV群は以下のように細分した。

II群

a 類 縄文の施された丸底・尖底の土器群（今回は出土していない）

b 類 円筒土器下層式に相当するもの

III群

a 類 円筒土器上層 a 式、円筒土器上層 b 式、サイベ沢VII式、見晴町式に相当するもの

b 類 榎林式、大安在B式、ノダップII式、煉瓦台式に相当するもの

IV群

a 類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの

b 類 ウサクマイC式、手稲式、鯉瀬式に相当するもの（今回は出土していない）

c 類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの（今回は出土していない）

(2) 石器等

石器は器種ごとの大分類に留め、記号を用いた細分は行わなかった。

出土した石器には石鏃、ポイントまたはナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、二次加工のある剥片（Rフレイク）、刃こぼれ状の使用痕のある剥片（Uフレイク）、フレイク、石斧、たたき石、すり石、石錘、砥石、石皿・台石がある。これらのほかに礫が出土している。

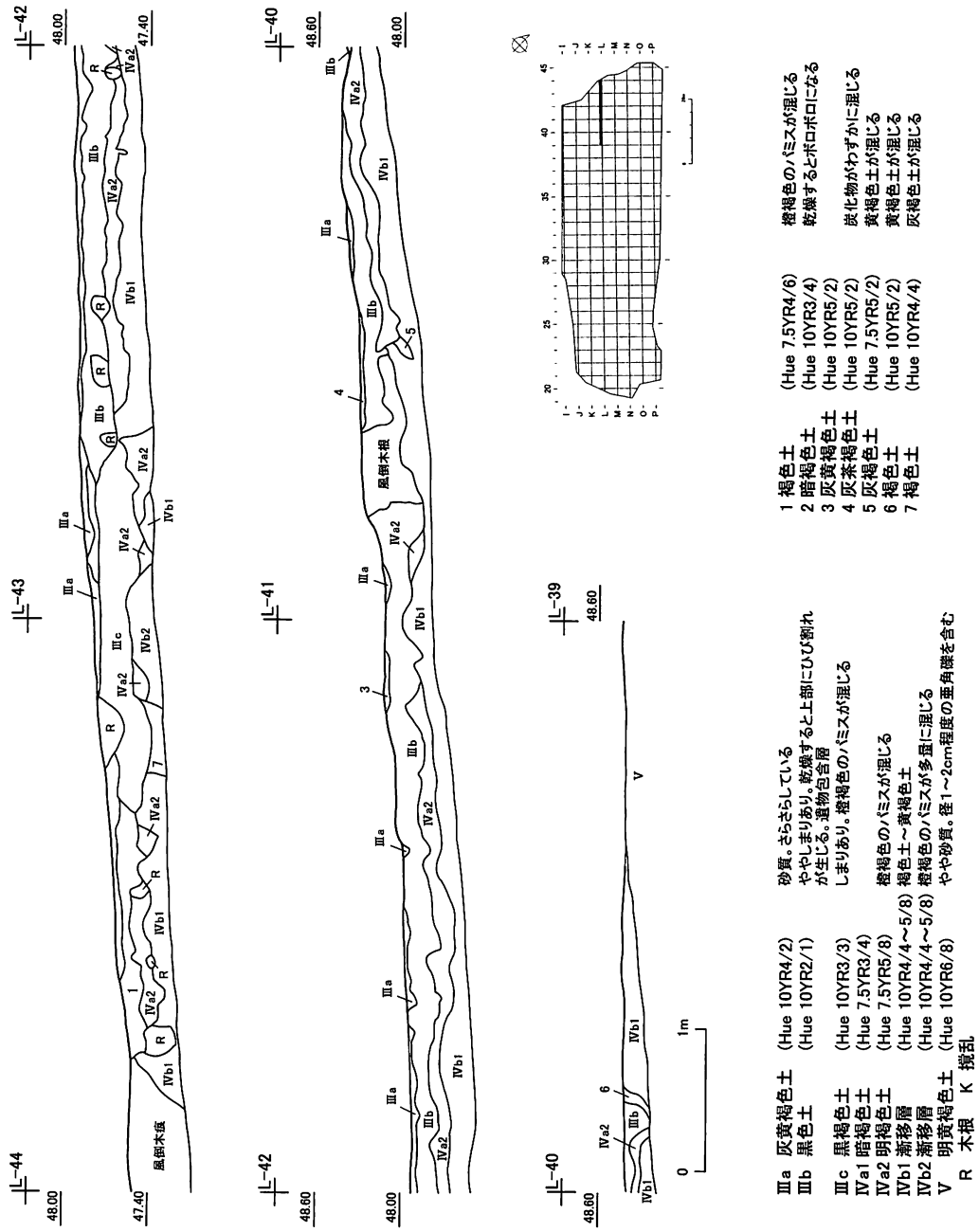


図 I-4 土層断面(1)

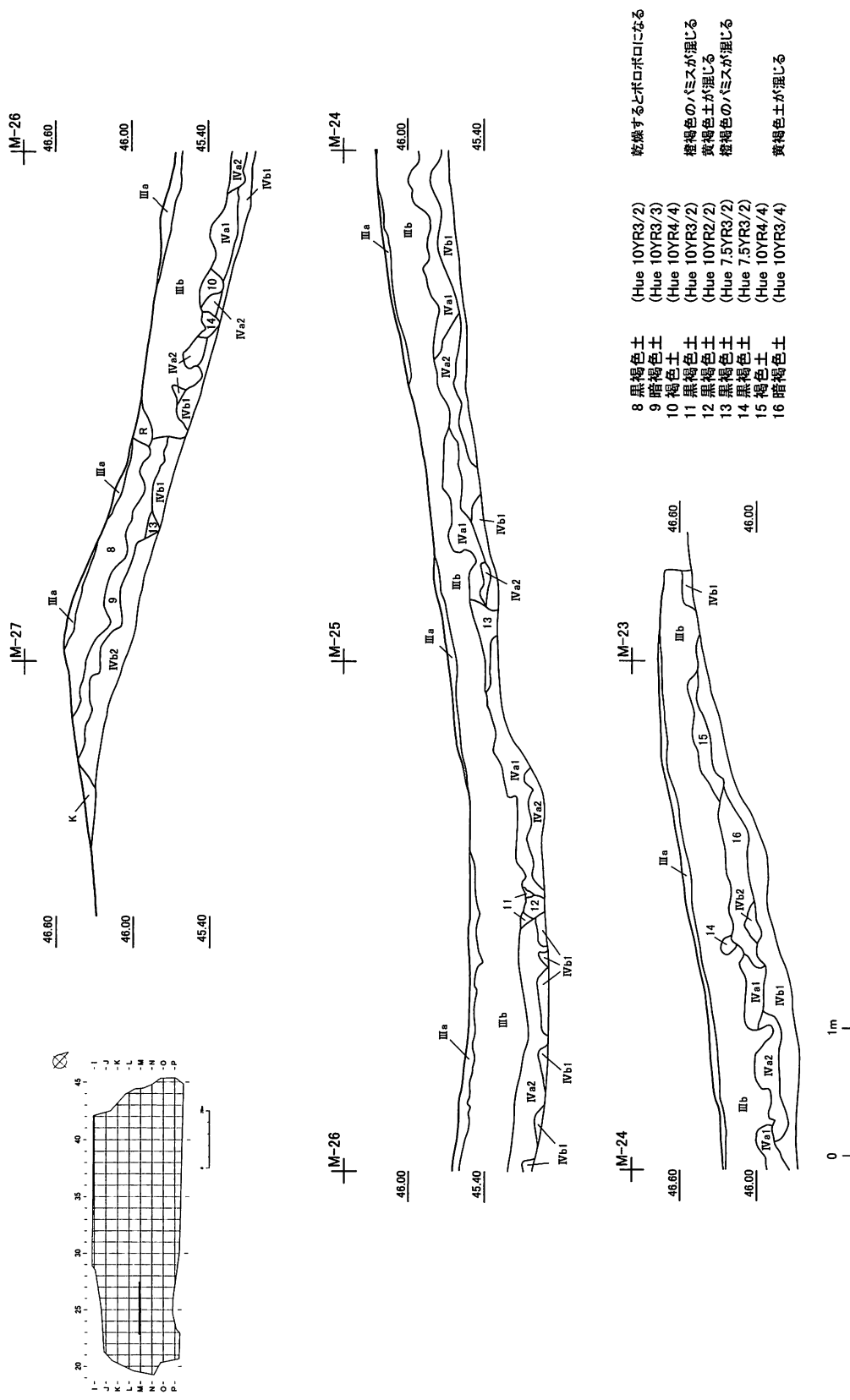


図 I-5 土層断面(2)

I 調査の概要

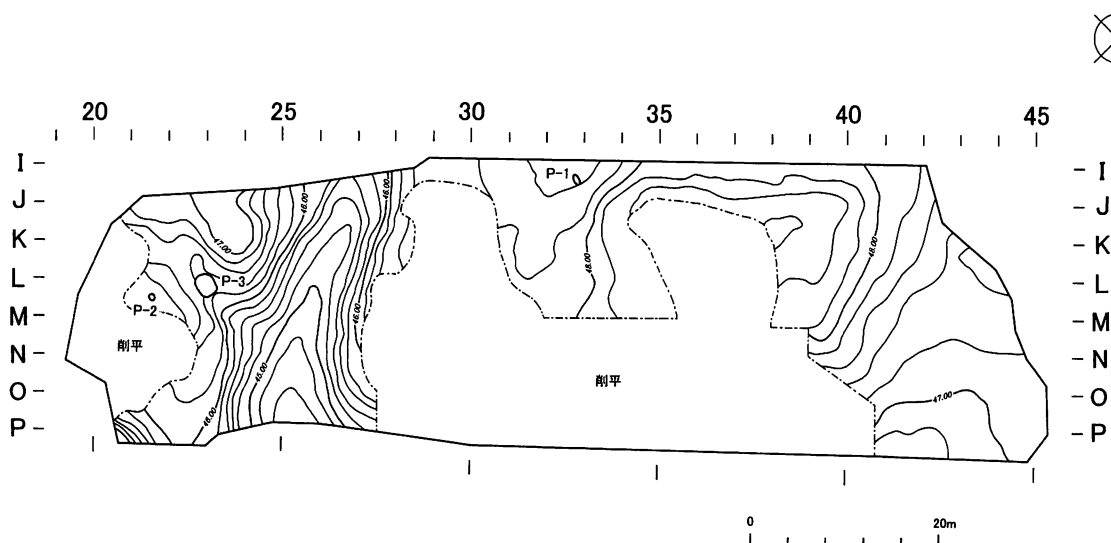


図 I - 6 遺構位置図

7 調査の概要

本遺跡は発掘区の南西と南側に沢跡があり、本来はゆるやかな起伏をなす地形だったと考えられる。南側の沢跡は農地造成を行った際に厚さ1~1.5mほど土盛りを行って平坦にされていた。調査区の中央部や南側の尾根状の部分は耕作や土取りによって、包含層が削平されていた。

遺構は、土壌3基が検出された(図I-6)。これらの中には石皿・台石等、礫石器の入れられたもの(P-2)や円筒土器上層b式の小型深鉢が横倒しの状態で出土したもの(P-3)がある。

遺物は892点出土した(表I-1)。土器は縄文中期前葉・後葉のものが主である。石器はスクレイパー、たたき石、石皿・台石が多い。

表 I - 1 出土遺物一覧

土 器			石 器 等					
分類	包含層	遺構	分 類	包含層	遺構	分 類	包含層	遺構
II b	1	0	石 鍬	1	0	すり石	8	0
III a	252	37	ポイント・ナイフ	2	0	たたき石	15	1
III b	204	0	つまみ付きナイフ	1	0	石 錘	1	0
IV a	19	0	スクレイパー	10	0	砥 石	1	0
V	9	0	Rフレイク	3	0	石皿・台石	23	3
VII	2	0	Uフレイク	8	0	礫・礫片	230	0
不 明	4	0	フレイク	43	0	原 石	1	0
			石 斧	9	0	軽 石	4	0
小 計	491	37	小 計				360	4
合 計							892	

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

遺跡の位置する森町は渡島半島の太平洋側中央部にあり、町の南東には駒ヶ岳がそびえている。南西は標高800～1,200mの山地から緩やかな斜面が噴火湾に向かって続き、海岸段丘を経て海に至る。それらを開析して流れる河川はいずれも南西から東北方向に流路をとっている。平均気温は8.1℃、年間降雨(降雪)量は1,000mm前後と少なく、北海道内では気候の温暖な地域である。

遺跡はJR石倉駅から南に約600mの舌状台地に立地し、北西は本内川、南東は三次郎川の支流の沢に面する段丘崖となっている。発掘区の標高は44～48m、海岸線からの距離は約300mで、沢沿いに国道5号から上がってくる道の背後に太平洋の広がりをものぞむことができる。段丘のへりにはクリの木が列をなし、強い風の吹いた翌朝にはまだ青いイガが発掘区の中にも落ちていた。

発掘区は調査の行われる以前は畑として利用されていた。本来はゆるやかな起伏のある地形だったが、馬の背状の中央部は農地の造成や土取りによってV層ないしVII層まで削平されていた。東側の沢は農地を造成する際に埋められて平坦になっていた。

本内川の本内はアイヌ語のpon-nai「ポン」(小さな)「ナイ」(川・沢)に漢字をあてたものである。現在、発掘区のある地域の町名は石倉町だが、1939(昭和14)年に地番改正が行われるまでは、大字石倉村字本内、本内小川など本内川に由来する小字があった。

ホンナイという地名が記録に残されたのは、1784(天明4)年の『北藩紀略』が最初である(竹内編 1987)。最上徳内らが東蝦夷地に派遣された際の見聞記である『東蝦夷地道中記』(1791=寛政3年)にも箱館六ヶ場所の一つであるカヤヘ場所、ワシノキ運上屋の項にボンナイという地名が記されている。同書には「…サワラよりホンナイ迄凡六里程皆浜辺通。…カヤヘ場所、ノタライ場所の境にイノウサキと云所、出崎とて蝦夷人幣束ヲ立置、古来此所ヲ境と仕来しに、近年蝦夷共境目論に及びモナシへ運上屋の際ホンナイと云小河是ヲ境とす」とあり、茅部場所かやべと野田追場所のたおいとの間で境界争いが起こった際に本内川が新たな境とされたようである(森町編 1980)(註1)。同年、噴火湾沿岸を有珠に向かった菅江真澄は「ボンナキなどの浦々」で昆布漁が行われていたことを『えぞのてぶり』に記している(菅江著 内田・宮本編 1971)。箱館六ヶ場所は1800(寛政12)年に村並になり、ほどなくホンナイは鷲の木村の支村である石倉村の管轄となったが、それ以前から「和人地に隣接する蝦夷地では和人の居住が進みつつあった」(舟山 2002)ことをこれらの資料からうかがうことができる。

1796(寛政8)年には松前藩士の高橋壮四郎寛光らが領内を巡視し、翌年、『蝦夷巡覧筆記』を著した。この中のカヤヘの項に「石クラト申処此辺ヒラ切ゴロタ浜幅セハシ、夫ヨリホンナヘト云小沢アリ、此所ヨリ砂り道行キ」とある(森町編 1980)。1799(寛政11)年には谷 元旦らが東蝦夷地の調査の帰路に「モナシへ川、ホンナイ、フックルナイ、ワチナイ、ヤウルフテキナイを渡」ったと『蝦夷紀行』にある(森町編 1980)。1807(文化4)年に幕府若年寄の堀田正敦が蝦夷地を巡検した際の『松前紀行』には、「あくる日ほんないをこえ、海ぎはを行くに、うす、ゑとももの崎遠く見渡さる」と記されている(森町編 1980)。当時、噴火湾沿いに松前藩領と東蝦夷地を結ぶ道は交通の要路であり、本内川を渡って多くの人々が往還したのである。

1855(安政2)年に東西蝦夷地が再び幕府の直轄地とされたのを契機として、幕府や諸藩による巡検調査が行われた。南部藩士の長沢盛至が同年に著した『東蝦夷地海岸図台帳』には、石倉の「西の方

II 遺跡の位置と環境

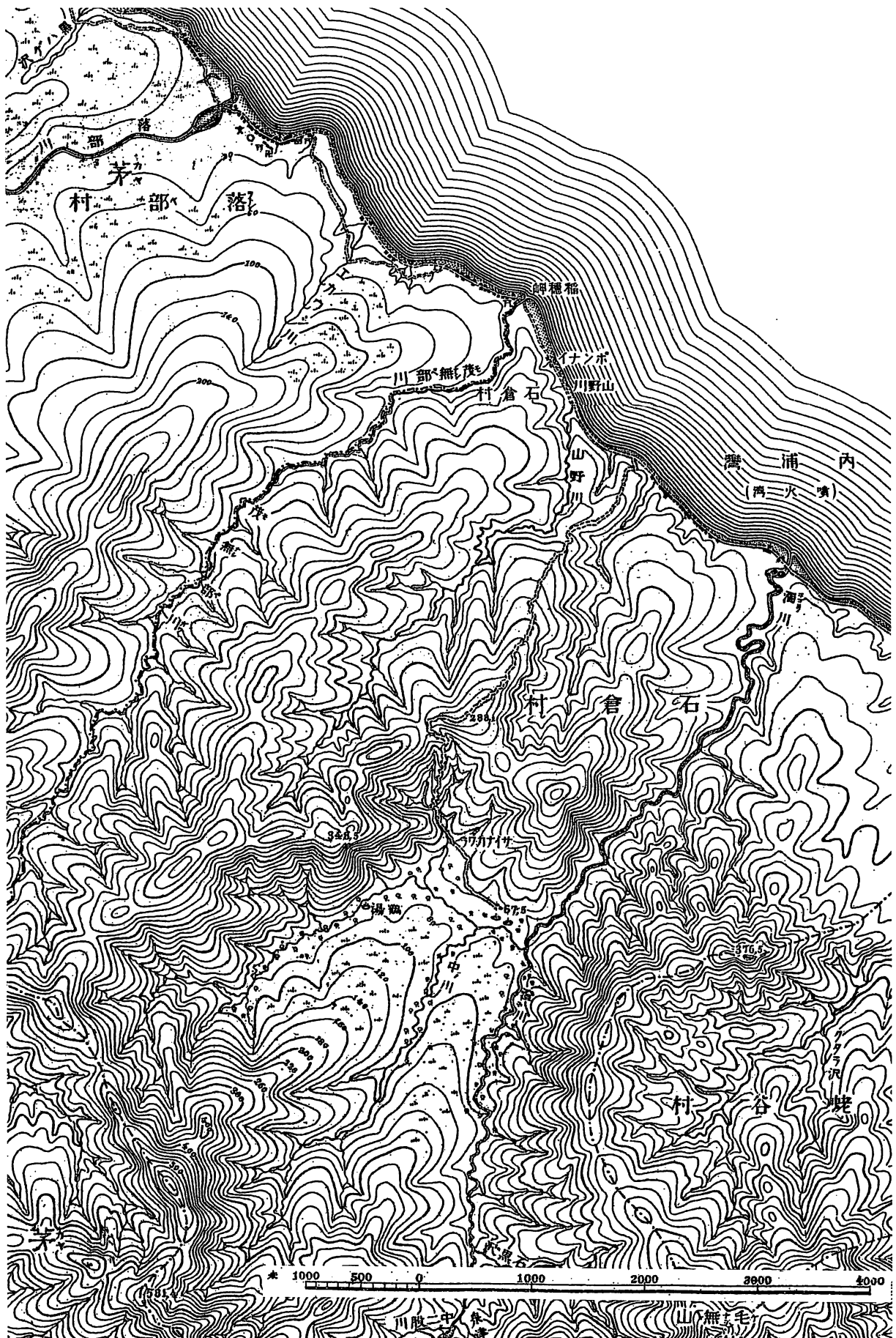
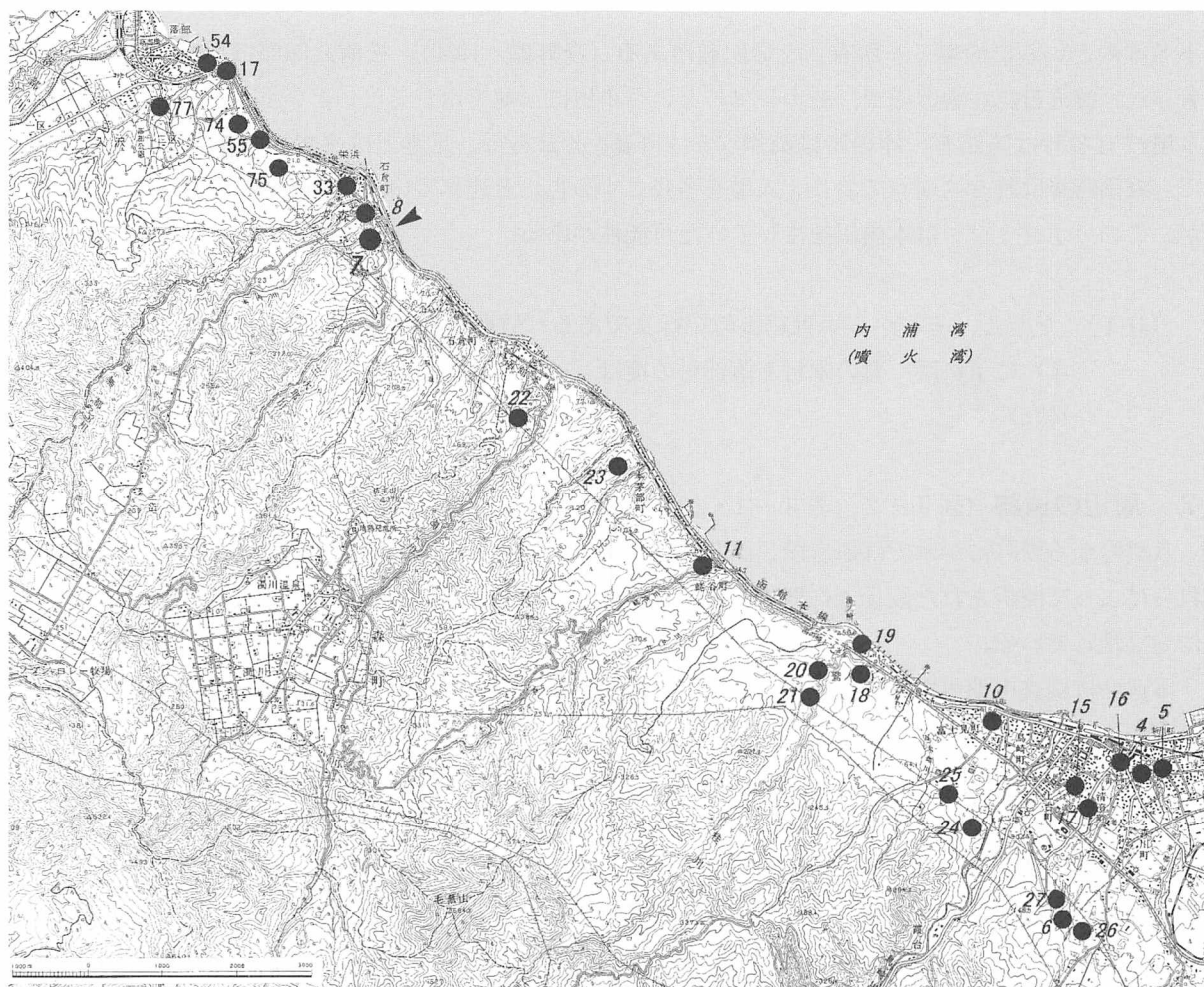


図 II - 1 遺跡周辺の旧地形図

(この図は大日本帝国陸地測量部、明治29年製版の假製5万分の1地形図「八雲」^{くしんだけ}「狗神岳」を複製したものである)



図Ⅱ-2 周辺の遺跡(この図は国土地理院発行5万分の1地形図「八雲」「濁川」「駒ヶ岳」を複製したものである)

表Ⅱ-1 八雲町内の遺跡

登載番号	遺跡名	所在地	立地	時期	備考
B-16-17	浜中1遺跡	落部470ほか	海岸段丘	縄文中期、統縄文(恵山)	桜井 1961・1964、及川 1987
B-16-33	柴浜1遺跡	柴浜92ほか	海岸段丘	縄文早期～晩期、統縄文(恵山・後北)、擦文	三浦 1983・1998、三浦・柴田 1986・1987、柴田 1995、道理文編 2002e
B-16-54	浜中2遺跡	落部459ほか	海岸段丘	統縄文(恵山)	
B-16-55	柴浜2遺跡	柴浜214ほか	海岸段丘	縄文早期～中期、擦文、近世	八雲町教委 平成12・13年度に発掘調査
B-16-74	柴浜3遺跡	柴浜240、入沢411ほか	海岸段丘	縄文中期、近世	八雲町教委 平成13年度に発掘調査
B-16-75	柴浜4遺跡	柴浜269ほか	海岸段丘		
B-16-77	落部1遺跡	入沢374ほか	海岸段丘	縄文中期～統縄文(後北)	道理文編 2003

表Ⅱ-2 森町内の遺跡(図Ⅱ-2では斜体で番号を表示した)

登載番号	遺跡名	所在地	立地	時期	備考
B-15-4	森川貝塚遺跡	森川町76～79ほか	低位海岸段丘	縄文前期、統縄文(恵山)、擦文、中近世	
B-15-5	森川1遺跡	森川町69-2ほか	低位海岸段丘	縄文前期・中期	森町教委 1982
B-15-6	森川2遺跡	字霞台34-1、35-2	丘陵	縄文後期	森町教委 平成14年度に発掘調査
B-15-7	本内川右岸遺跡	字石倉町610-7・8	台地	縄文中期・後期	本遺跡
B-15-8	茂無部川右岸遺跡	字石倉町610-2・5	台地	縄文中期・後期	
B-15-10	鳥崎遺跡	鳥崎31-1ほか、字富士見町1～3ほか	海岸段丘	縄文後期	佐藤編 1979
B-15-11	蛭谷遺跡	字蛭谷町146-1ほか	河岸段丘	縄文中期・後期	森町教委 昭和46年度に発掘調査
B-15-15	オニウシ遺跡	字上台町326-18	海岸段丘	縄文早期～中期	森町教委 1977
B-15-16	御幸町遺跡	字御幸町132-2ほか、字清澄3-1ほか	海岸段丘	縄文中期、擦文	藤田 1985・1994
B-15-17	清澄遺跡	字清澄27、29-2	海岸段丘	縄文中期	
B-15-18	鷺の木1遺跡	字鷺の木145-1ほか	海岸段丘	縄文中期	
B-15-19	鷺の木2遺跡	字鷺の木455ほか	海岸段丘	近世	台場跡
B-15-20	鷺の木3遺跡	字鷺の木499-2ほか	河岸段丘	縄文中期、統縄文(恵山)	
B-15-21	鷺の木4遺跡	字鷺の木506ほか	台地	縄文中期・晩期、統縄文(恵山)	藤田・荻野編 2002
B-15-22	濁川左岸遺跡	字石倉町401ほか	河岸段丘	縄文前期～後期	道理文 平成13・14年度に発掘調査
B-15-23	本茅部1遺跡	字本茅部町205ほか	海岸段丘	縄文中期	道理文 平成14年度に発掘調査
B-15-24	栗ヶ丘1遺跡	字栗ヶ丘38～44	河岸段丘	縄文中期・後期	藤田・荻野編 2002
B-15-25	倉知川右岸遺跡	字栗ヶ丘7.11-1・2	丘陵	縄文中期・後期	道理文 平成14年度に発掘調査
B-15-26	森川3遺跡	字森川町317-1・7	丘陵	縄文前期・中期、統縄文(恵山)	道理文 平成14年度に発掘調査
B-15-27	上台1遺跡	字上台33-1ほか	丘陵	縄文後期	

II 遺跡の位置と環境

小名本内といふに漁場一ヶ所有」との記載がある（森町編 1980）。松浦武四郎は1865（慶応元）年に著した『渡島日誌』巻の四で、「モナシベ」という小川に「並てホンミヅ」という小沢があり、「此処より風波有る時は陸路有。浮の時は海岸タテノ下崖也と云を行。此処上は平場にて崖数十丈の平崩にて、霖雨時等は時々崩れており、人馬を怪我さす也」と述べている（松浦著 秋葉解説 1988）が、この「ホンミヅ」は本内川をさしていた可能性がある。

（註1） ただし、それから半世紀後の紀行文である『竹四郎廻浦日記』巻の三十（1857＝安政4年）によれば、鷺の木村と落部村の境は「イナヲサキ」になっている（松浦著 高倉編 1978）。

2 周辺の遺跡（図Ⅱ-2、表Ⅱ-1・2）

八雲町から森町にかけては海岸段丘が発達し、河川や沢が海岸線に直交して流れている。遺跡はこれらによって開析された段丘上に群をなして分布し、海岸から数km山側に入った河岸段丘や丘陵の上にも立地している。

本遺跡は縄文中期が主体になっているが、周辺で中期の遺物が出土している遺跡には、八雲町内では落部1、浜中1、栄浜1、栄浜2、栄浜3の各遺跡、森町内では茂無部川^{もなしべがわ}右岸遺跡、濁川左岸遺跡がある。本遺跡の北北西約800mに位置する栄浜1遺跡では、竪穴住居跡・土壇墓・配石遺構等、中期前葉から末葉にいたる数多くの遺構が検出されており、八雲町南部地域の拠点的な遺跡といえよう（道埋文編 2002 e、柴田 1995、三浦・柴田 1986・1987、三浦 1983・1998）。茂無部川右岸遺跡は本内川をはさんで本遺跡の北側に立地する遺跡である。濁川左岸遺跡ではサイベ沢Ⅶ式から見晴町式の時期の竪穴住居跡等が調査されている（道埋文編 2002 f）。本遺跡から南東に約12kmの距離にある御幸町遺跡では、榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式の時期の竪穴住居跡やフラスコ状ピット等、中期後半の遺構が多数検出されている（藤田 1985）。

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

1 概要

土壌3基が発掘区の南側から検出された。これらのうち、P-1・3は浅い沢跡の内部に位置する。いずれの遺構も性格は不明だが、P-1・3の覆土は埋め戻された可能性がある。時期はP-3が縄文時代中期前葉で、P-1は中期後葉と考えられる。P-2の詳細な時期は不明である。

2 土 壌

P-1 (図Ⅲ-1、表Ⅲ-1、図版4-1・2)

位置 I-32-c・d

規模 112×68/96×54/33

長軸方向 N-21.5°-E

平面形 不整楕円形

確認・調査 発掘区南西の浅い沢跡を調査中にV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、半截して底面と壁の立ち上がりを検出した。壁は急な角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は黄褐色土やパミスを含み、埋め戻された可能性がある。

遺物 出土していない。

時期 周囲のⅢ層からノダップⅡ式の復原個体(図Ⅳ-1-5)が出土しており、縄文中期後葉の遺構の可能性がある。

P-2 (図Ⅲ-1・2、表Ⅲ-1・2、図版4-3・4、5-1)

位置 L-21

規模 66×56/54×50/14

長軸方向 N-44.5°-E

平面形 楕円形

確認・調査 発掘区の南側でⅢ層の残存する部分を調査中、Ⅲ層下位で礫石器が径50cmほどの範囲にまとまって出土した。それらを取り上げずに残したままさらに周囲を掘り下げたところ、IVb層上面で黒色土の落ち込みを確認したので半截し、底面と壁の立ち上がりを検出した。壁は急な角度で立ち上がる。底面は東側が低くなっている。

遺物 (図Ⅲ-2、図版5-1) 1はたたき石である。長軸の一端に敲打痕のあるもので、この面を土壌の外側に向けて壁際から出土した。2・3は石皿・台石、4は石皿・台石の破片である。2は扁平な礫を素材としたもので、片面にすり痕がある。使用面の右側は茶色に変色しており(薄いスクリーン・トーンの部分)、焼けた可能性がある。濃いスクリーン・トーンで示した部分には煮こぼれ状のものが付着して黒くなっている。3・4は曲面にわずかに敲打痕がある。これらはいずれも使用面を上にして出土した。

時期 縄文時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。

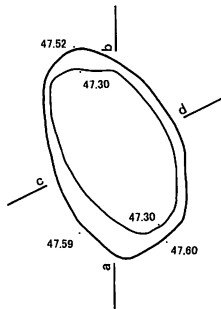
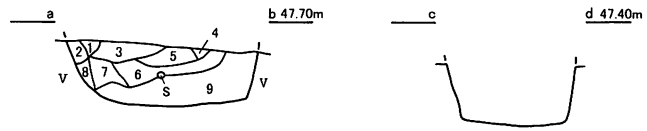
P-3 (図Ⅲ-3・4、表Ⅲ-1・3、図版4-5・6、5-2)

位置 K-22-c、K-23-b、L-22-d、L-23-a

III 遺構と遺構出土の遺物

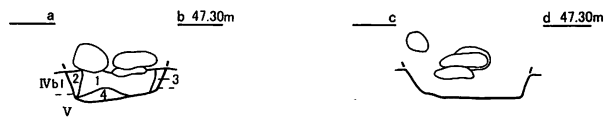
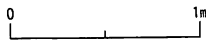
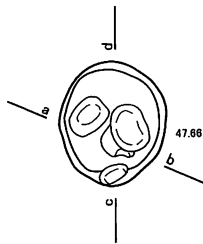
P-1

+I-33

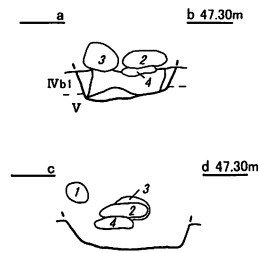
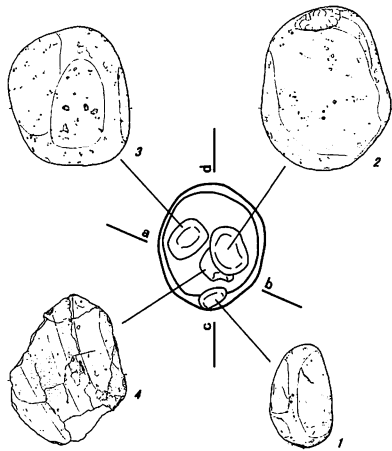


- | | |
|---------|------------------------------------|
| 1 黄褐色土 | 黒色土が混じる。ややボソボソしている |
| 2 黄褐色土 | 黒褐色土が混じる |
| 3 黒褐色土 | 黄褐色土・パミスが混じる。ややしまりあり |
| 4 暗茶褐色土 | 黄褐色土が混じる。ややボソボソしている |
| 5 暗黄褐色土 | 暗茶褐色土が混じる。ややしまりあり |
| 6 暗褐色土 | 黄褐色土・パミスが混じる。炭化物がごくわずかに混じる。ややしまりあり |
| 7 黒褐色土 | 黄褐色土・パミスが混じる。ややしまりあり。3よりも黄色味が強い |
| 8 黄褐色土 | パミスが混じる。やや粘性あり |
| 9 黄茶褐色土 | パミスが混じる。しまりあり |
| S 礫 | |

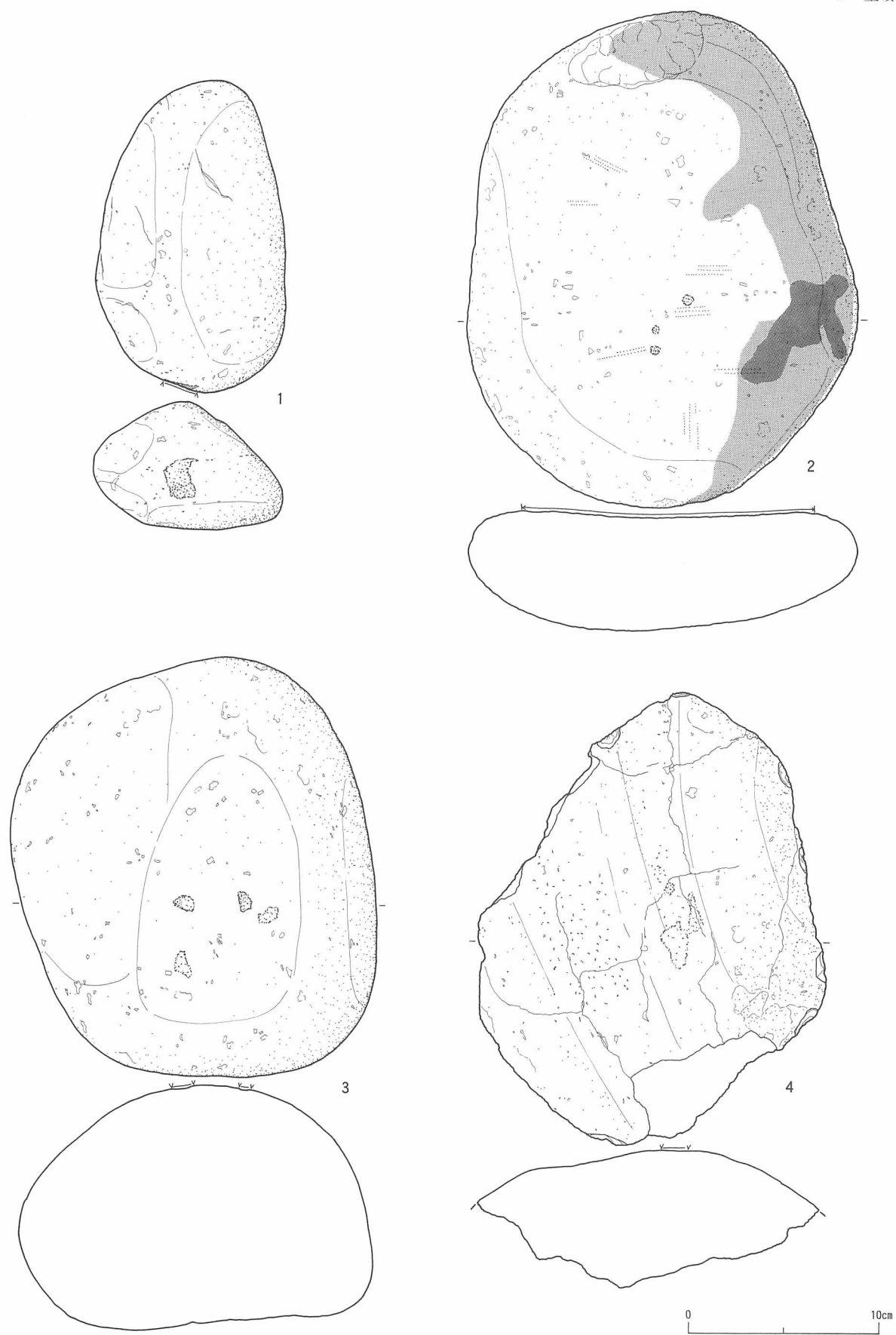
P-2



- | | | |
|-----------|---------------|-----------------------------|
| 1 黒色土 | (Hue 2.5Y2/1) | 暗黄褐色土が混じる。しまりあり |
| 2 オリーブ褐色土 | (Hue 2.5Y4/6) | やや粘性あり |
| 3 黄褐色土 | (Hue 2.5Y5/6) | 黒褐色土が混じる。炭化物がわずかに混じる。やや粘性あり |
| 4 オリーブ褐色土 | (Hue 2.5Y4/3) | 黒褐色土が混じる。しまりあり |

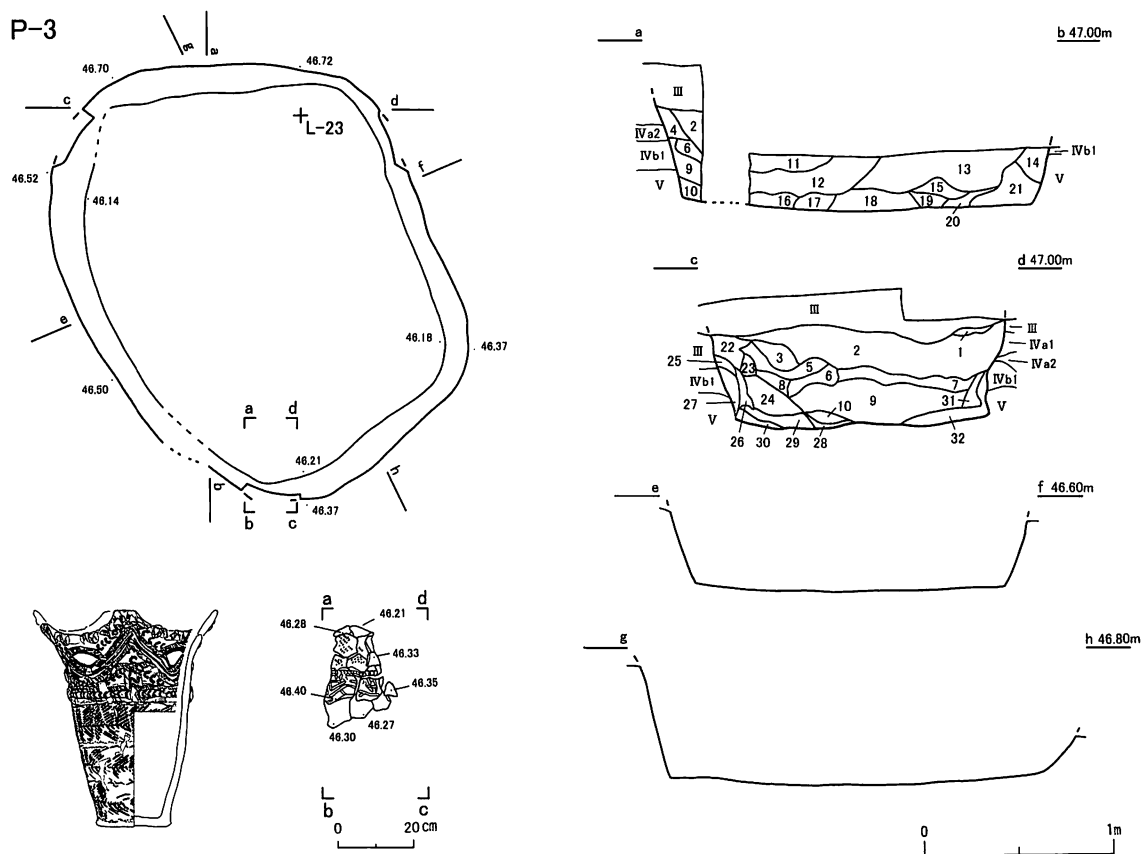


図III-1 土壌 (P-1・2)



図Ⅲ-2 P-2 出土の石器

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物



- | | | |
|---------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色土 (Hue 2.5Y5/6) | 17 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/1) | 黄褐色土のブロックが混じる。炭化物がわずかに混じる |
| 2 黒色土 (Hue 2.5Y2/1) | 18 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y4/6) | 黄褐色土・炭化物が混じる。しまりあり |
| 3 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y4/3) | 19 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/1) | 黄褐色土・炭化物が混じる。ややボンボンする |
| 4 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) | 20 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y4/4) | 黄褐色土が混じる |
| 5 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) | 21 黄褐色土 (Hue 2.5Y5/6) | 炭化物がわずかに混じる |
| 6 褐色土 (Hue 10YR4/6) | 22 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y4/6) | 黄褐色土粒が混じる |
| 7 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/2) | 23 黒褐色土 (Hue 10YR3/1) | やや砂質 |
| 8 暗オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y3/3) | 24 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/2) | 黄褐色土が混じる。粘性あり |
| 9 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/1) | 25 黄褐色土 (Hue 2.5Y5/6) | |
| 10 黄褐色土 (Hue 2.5Y5/6) | 26 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/1) | |
| 11 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/1) | 27 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y4/6) | |
| 12 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y4/3) | 28 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) | 黄褐色土が混じる |
| 13 暗オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y3/3) | 29 黒色土 (Hue 2.5Y2/1) | 粘性あり |
| 14 暗灰黄色土 (Hue 2.5Y5/2) | 30 明黄褐色土 (Hue 2.5Y6/8) | 砂質 |
| 15 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y4/3) | 31 暗灰黄色土 (Hue 2.5Y4/2) | 黒褐色土が混じる |
| 16 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/2) | 32 黒褐色土 (Hue 2.5Y3/1) | 黄褐色土が混じる。やや粘性あり |

図Ⅲ-3 土壌 (P-3)

規模 246×190／220×166／62

長軸方向 N-18.5°-E

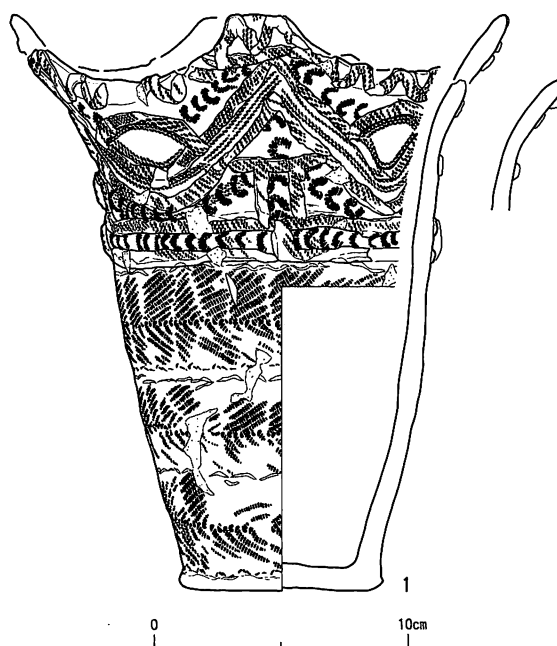
平面形 不整形

確認・調査 L-22・23のIV b層を調査中に黒褐色土が径約2 mの範囲に広がっていたので、23ラインとLラインに沿ってトレンチを入れ、底面と壁の立ち上がりを検出した。掘り込み面はⅢ層の中位と考えられる。Lラインに沿ったトレンチでは、土壌の壁際で小型の深鉢形土器（図Ⅲ-4-1）が口縁部を北東に向けて横倒しの状態で出土した（図版4-6）。土器の内部には口縁部まで土が詰まっていた。

壁は急な角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。掘り込み面はⅢ層の中位と考えられる。覆土は黄褐色土・黒褐色土・炭化物が混じり、埋め戻された可能性がある。底面はほぼ平坦である。

遺物（図Ⅲ-4、図版5-2） 1は4個の弁状突起をもつが、突起のうち3個は欠損している。口唇直下は肥厚し、波状の貼付帯がめぐる。口縁部から胴部上位には無文地に弧線状の撚糸圧痕が突起の間をつなぐように施され、それらに沿って粘土紐が貼付されている。突起の下位には2本一組の垂下する短い貼付帯も加えられている。貼付帯上には撚糸圧痕が施される。突起の下位や粘土紐の上下には馬蹄形圧痕が施されているが、前者は粘土紐の貼付より前、後者は後の施文である。文様帯は2本一組の横走る貼付帯で区画され、それらの下位には結束第1種羽状縄文が施されている。内面はみがかれているが、器面にはやや凹凸がある。底部は外側に張り出し、外底面はみがかれている。底部の内面中央部はやや肥厚する。内面の胴部中位から下位にかけては炭化物が付着している。胎土は砂粒が多く、海綿骨針をわずかに含む。円筒土器上層b式に相当する土器である。

時期 出土した土器から縄文中期前葉の遺構と考えられる。



図Ⅲ-4 P-3出土の土器

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

表Ⅲ－１ 遺構一覧

遺構名	調査区	規模 (cm)	長軸方向	平面形	時期
P-1	I-32-c・d	112×68/96×54/33	N-21.5°-E	不整楕円形	縄文中期後葉?
P-2	L-21	66×56/54×50/14	N-44.5°-E	楕円形	縄文
P-3	K-22-c, K-23-b, L-22-d, L-23-a	246×190/220×166/62	N-18.5°-E	不整形	縄文中期前葉

表Ⅲ－２ P-2出土掲載石器一覧

図番号	名称	層位	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
Ⅲ-2-1	たたき石	覆土	1	16.3	10.0	6.6	1,400	安山岩	
2	石皿・台石	"	2	25.9	20.5	6.0	4,700	"	
3	"	"	3	22.0	19.2	12.5	7,920	"	
4	"	"	4	(23.6)	(28.2)	(7.0)	(2,600)	"	

表Ⅲ－３ P-3出土復原土器一覧

図番号	層位	番号	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
Ⅲ-4-1	覆土下	1	Ⅲ a	(19.7)	8.0	22.7	

IV 包含層出土の遺物

1 概要

包含層からは851点の遺物が出土した。遺物の57.7% (491点)は土器、27.0% (230点)は礫・礫片である。これらは発掘区の南西と南側にある2つの沢跡とその周囲、および発掘区北側のいずれもⅢ層の残存する部分に主に分布していた。

2 土器 (図Ⅳ-1～3、表Ⅳ-1・2、図版6-2・3・6、図版7-1)

土器片491点のうち、252点(51.3%)は縄文中期前葉のもので、中期中葉～後葉の土器204点(41.5%)がそれに次いで出土している。

Ⅱ群b類 (図Ⅳ-1-1)

南側の沢跡から1点出土した(図Ⅳ-2)。1は多軸絡条体の圧痕が施されている。

Ⅲ群a類 (図Ⅳ-1-2・3)

252点が主に南側の沢跡から出土した(図Ⅳ-2)。

2は発掘区の北側から出土した。山形の突起をもつもので、突起の下位には貫通孔がある。口唇直下は一部が肥厚し、口唇から直下にかけて撚糸の圧痕や押引状の刺突が加えられている。内面の調整はミガキである。胎土に海綿骨針を含む。見晴町式に相当すると考えられる。

3は口縁部の欠損する深鉢形土器である。胴部と底部は接合せず、図上で復原した。発掘区南側の沢跡の中で、K-27の杭の周辺に散らばった状態で出土した(図版6-1)。器面には凹凸があり、結束第2種羽状縄文が施されている。胴部下位は無文でみがかれ、内面もみがかれている。胎土は海綿骨針を含み、細礫をわずかに含む。外面の一部に炭化物が付着している。

Ⅲ群b類 (図Ⅳ-1-4～12)

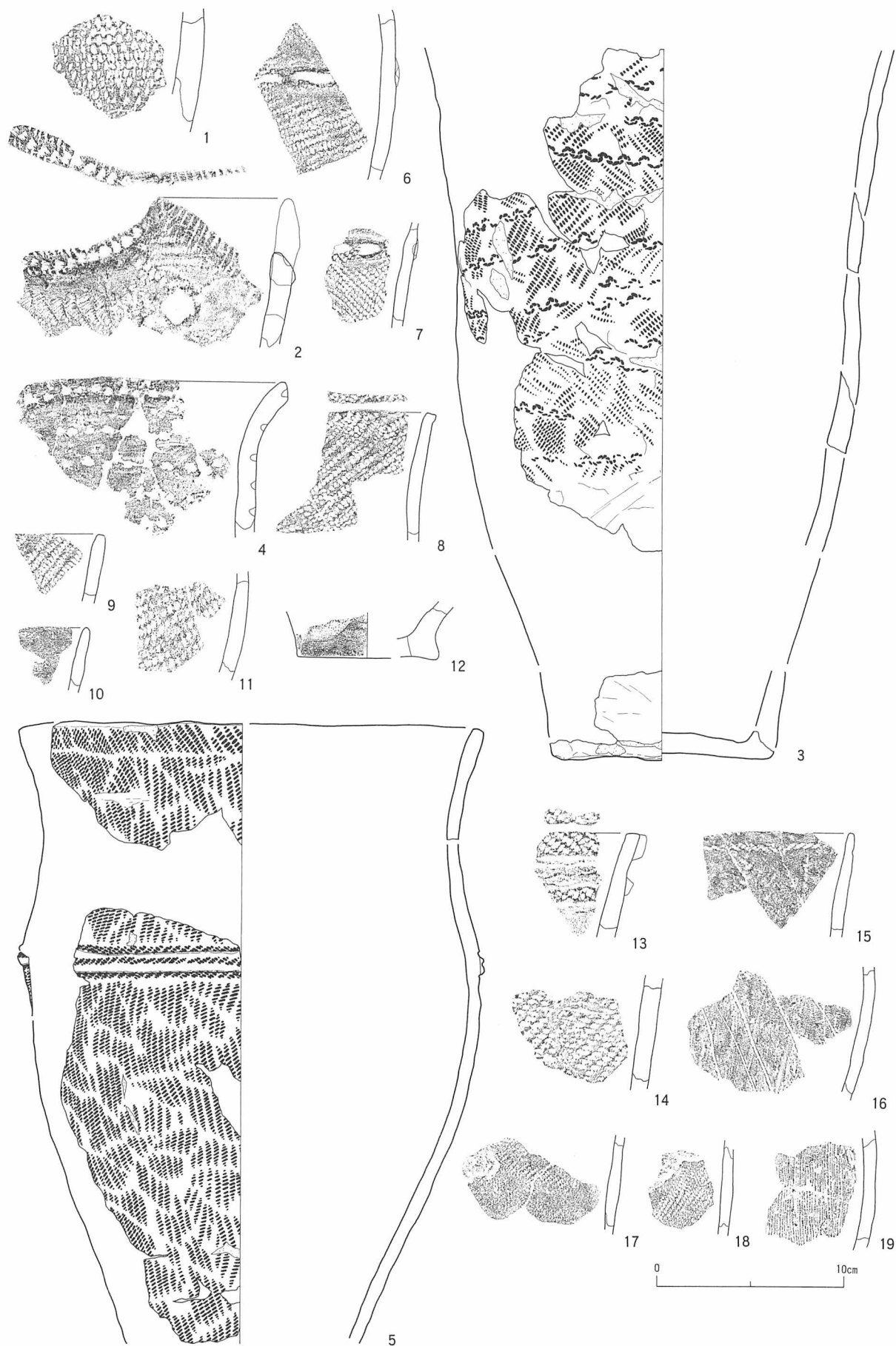
2つの沢跡から204点が出土した。これらのうちノダップⅡ式に相当するものは南西の沢跡からの出土が多い(図Ⅳ-2・3)。

4は無文地に横方向の調整が施され、横位の刺突列が加えられたもので、口縁部の断面は三角形である。内面はみがかれている。8は縄文のみが施されたと考えられるもので、口縁部の断面は角張っており、口唇にも縄文が施されている。どちらも胎土に海綿骨針を含む。これらは大安在B式に相当するものである。

5は南西の浅い沢跡の中に散在していた(図版6-4・5)。胴部が膨らみ、頸部がゆるやかにくびれる器形で、底部は欠損している。口唇はみがかれ、断面は角ばる。胴部中位に扁平な横位の粘土紐が貼り付けられ、器面になでつけられた後に、口縁部には横位から斜位、胴部には斜位回転のRL縄文が施されたもので、貼付帯上や貼付帯の上下の縁には横走する縄線文が加えられている。内面は口縁部から胴部上位が横、胴部下位が縦方向にみがかれている。胎土に砂粒を含む。外面の口縁部から胴部上位と胴部下位の一部にはハジケがあり、胴部内面には炭化物が付着している。6の縄文は横走気味で、貼付帯上には短刻線が施されている。7は粘土紐を貼り付けた後にその上から下位にかけて縄文の施されたもので、貼付帯上には短刻線も加えられている。9は縄文のみが施されたと考えられる。口縁部の断面は角張る。6・7・9は内面がみがかれており、胎土に海綿骨針を含む。以上の土器はノダップⅡ式に相当する。

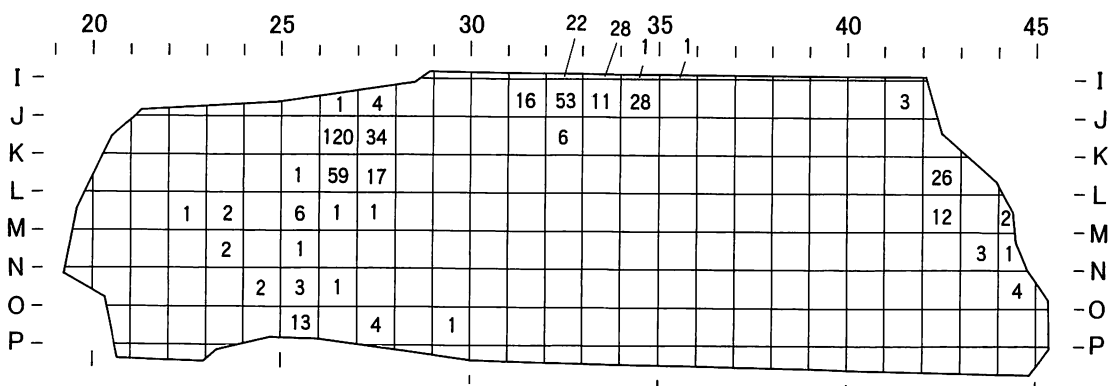
10は小型で無文の土器である。口縁部の断面は尖る。胎土に海綿骨針を含む。11・12は同一個体

IV 包含層出土の遺物

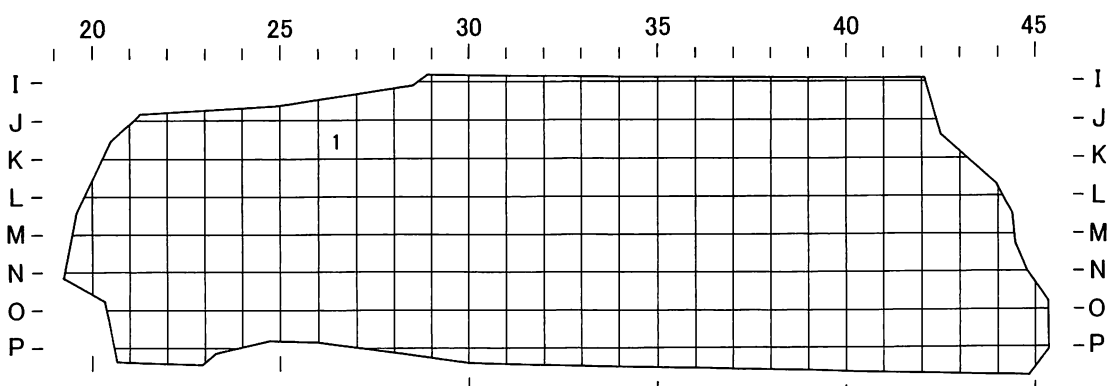


図IV-1 包含層出土の土器

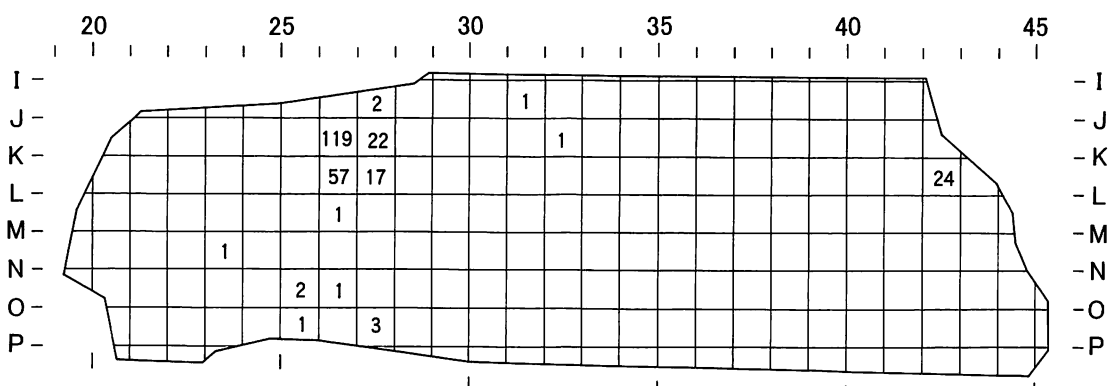
土器総点数 491点



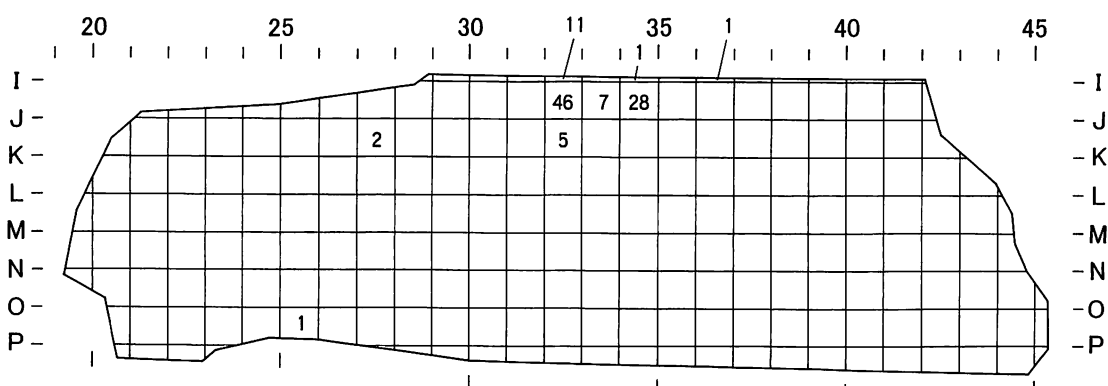
II群b類 1点



III群a類 252点



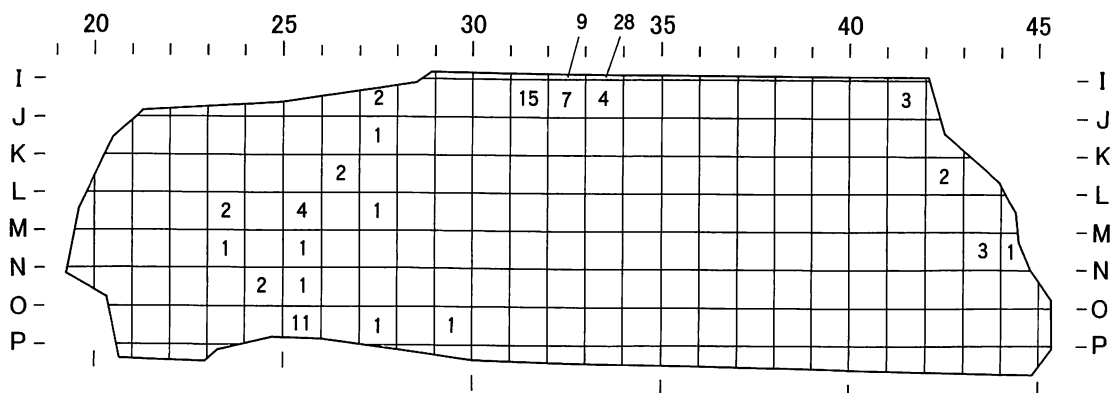
III群b類 (ノダップⅡ式) 102点



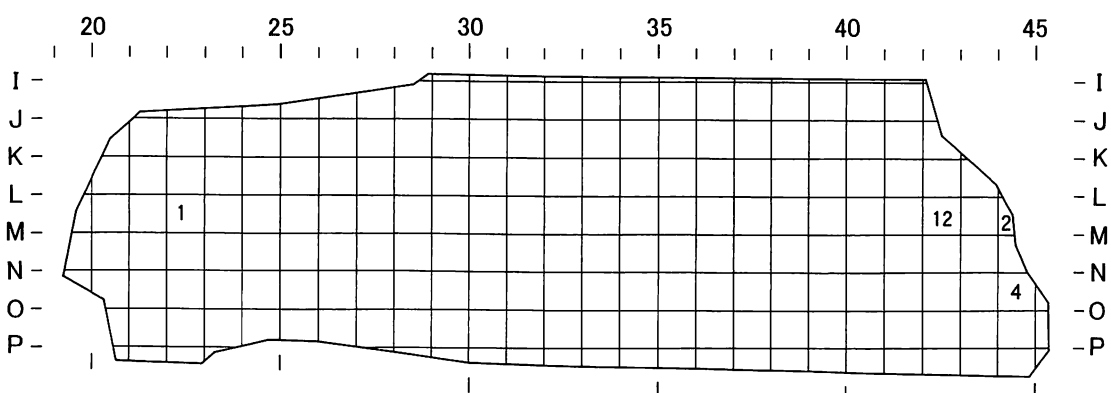
図IV-2 包含層出土土器の分布(1)

IV 包含層出土の遺物

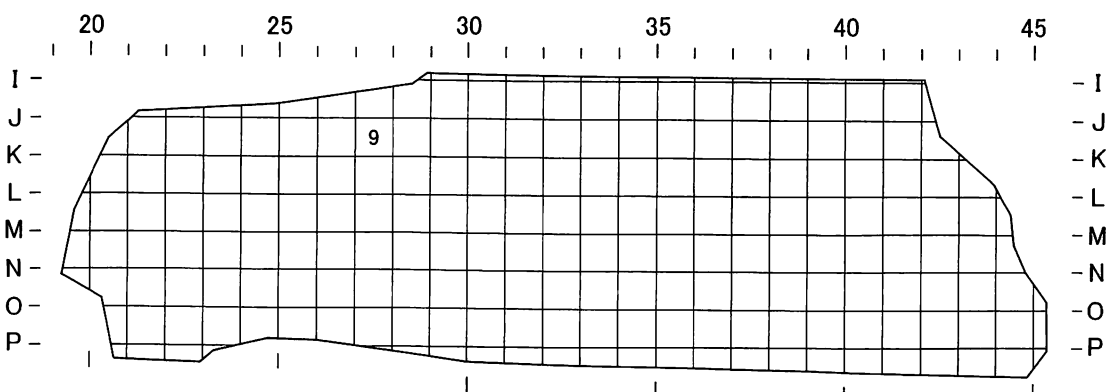
III群b類 102点



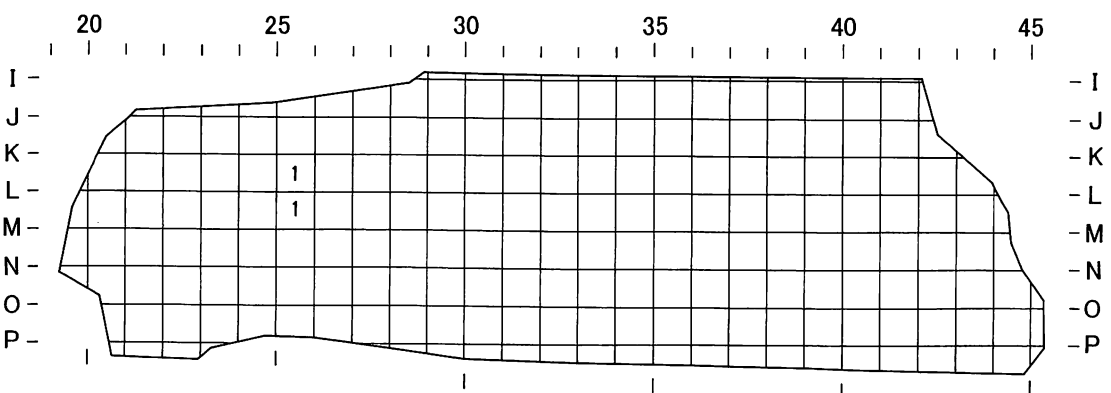
IV群a類 19点



V群 9点



VII群 2点



図IV-3 包含層出土土器の分布(2)

で、底部付近は無文である。内面はみがかれている。胎土に海綿骨針や細礫を含む。

IV群 a 類 (図IV-1-13~16)

19点出土し、それらのほとんどは発掘区の北側に分布している (図IV-3)。

13は無文地の口縁に2条の粘土帯を貼付し、その上にRL斜行縄文の施されたもので、口唇にも縄文が加えられている。胎土は細礫や砂粒が多い。14は複節の原体を縦方向に回転したものである。これらは天祐寺式に相当するものであろう。

15は低い山形の突起をもつと考えられるもので、口縁部の断面は角張る。口唇直下には横位の縄圧痕があり、LRとRLの2種類の原体が用いられている。器面には凹凸があり、外面に炭化物が付着する。胎土に海綿骨針を含む。16は無文地を縦位に調整した後に斜位の細い沈線が施されたもので、内面はみがかれている。外面に炭化物が付着する。これらは後期前葉の土器と考えられる。

V群 (図IV-1-17・18)

南側の沢跡から9点が出土した (図IV-3)。17・18は同一個体で、斜行縄文が施されている。内面には横位や斜位の調整痕がある。

VII群 (図IV-1-19)

南側の沢跡から2点が出土し (図IV-3)、接合した。19は甕形土器の胴部破片である。外面は縦位のハケ目調整が施されている。内面の調整は縦位のミガキで、黒色処理がなされ、炭化物が付着している。胎土に海綿骨針を含む。

3 石器等 (図IV-4~9、表IV-3、図版7-2、図版8・9)

石器等は360点出土したが、礫・礫片(230点、27.0%)やフレイク(43点、11.9%)が多い。礫石器は南西の沢跡から多く出土している (図IV-9)。石質は、剥片石器は頁岩、礫石器は安山岩のものが主である。

石鏃 (図IV-4-1)

発掘区の南側から1点が出土した (図IV-8)。1は柳葉形のもので、基部は再加工された可能性がある。

ポイントまたはナイフ (図IV-4-2・3)

南西の沢跡から2点が出土した (図IV-8)。2は球顆をやや多く含む黒曜石製のもので、両面に粗い剥離が施され、尖頭部・基部とも欠損している。発掘区から出土した黒曜石製の石器はこの1点のみである。3はかえしが不明瞭な幅広の基部をもつもので、尖頭部は欠損している。背面の周辺に二次加工が施されている。

つまみ付きナイフ (図IV-4-4)

南西の沢跡から1点が出土した (図IV-8)。4は縦形で、背面に周辺加工が施されたものである。

スクレイパー (図IV-4-5~10)

発掘区の西側と南側から10点が出土した (図IV-8)。いずれも剥片の形状を大きく変えずに、周辺に二次加工が施されている。10の石質は流紋岩、7は流紋岩の可能性はある。

石斧 (図IV-4-11~13)

発掘区の北西と南側から9点が出土した (図IV-8)。11は基部、12・13は刃部の破片で、3点とも研磨整形がなされている。11は小型で、撥形になると考えられる。12・13は曲刃で両刃である。

たたき石 (図IV-5-14~19)

15点が散在して出土した (図IV-9)。これらは円礫や楕円礫を素材としており、14は長軸の両端

IV 包含層出土の遺物

と側縁、15は長軸の一端、16は長軸の一端と側縁の一部に敲打痕がある。17～19は腹面・背面に敲打痕のあるもので、17・19は長軸の一端も使用されている。18は両面が赤黒く変色しており（スクリーン・トーンの部分）、焼けた可能性がある。14の石質は珪質分の多い泥岩である。

すり石（図IV-5-20～23）

主に発掘区の西側から8点が出土した（図IV-9）。20は楕円礫を素材としたもので、すり面は曲面になっており、側縁には敲打痕がある。側縁の一部はうすく灰色に変色している。21は断面が三角形で、稜にすり面がある。22・23は扁平な礫の側縁にすり面のあるもので、22は半円状扁平打製石器の破片の可能性がある。

石錘（図IV-6-24）

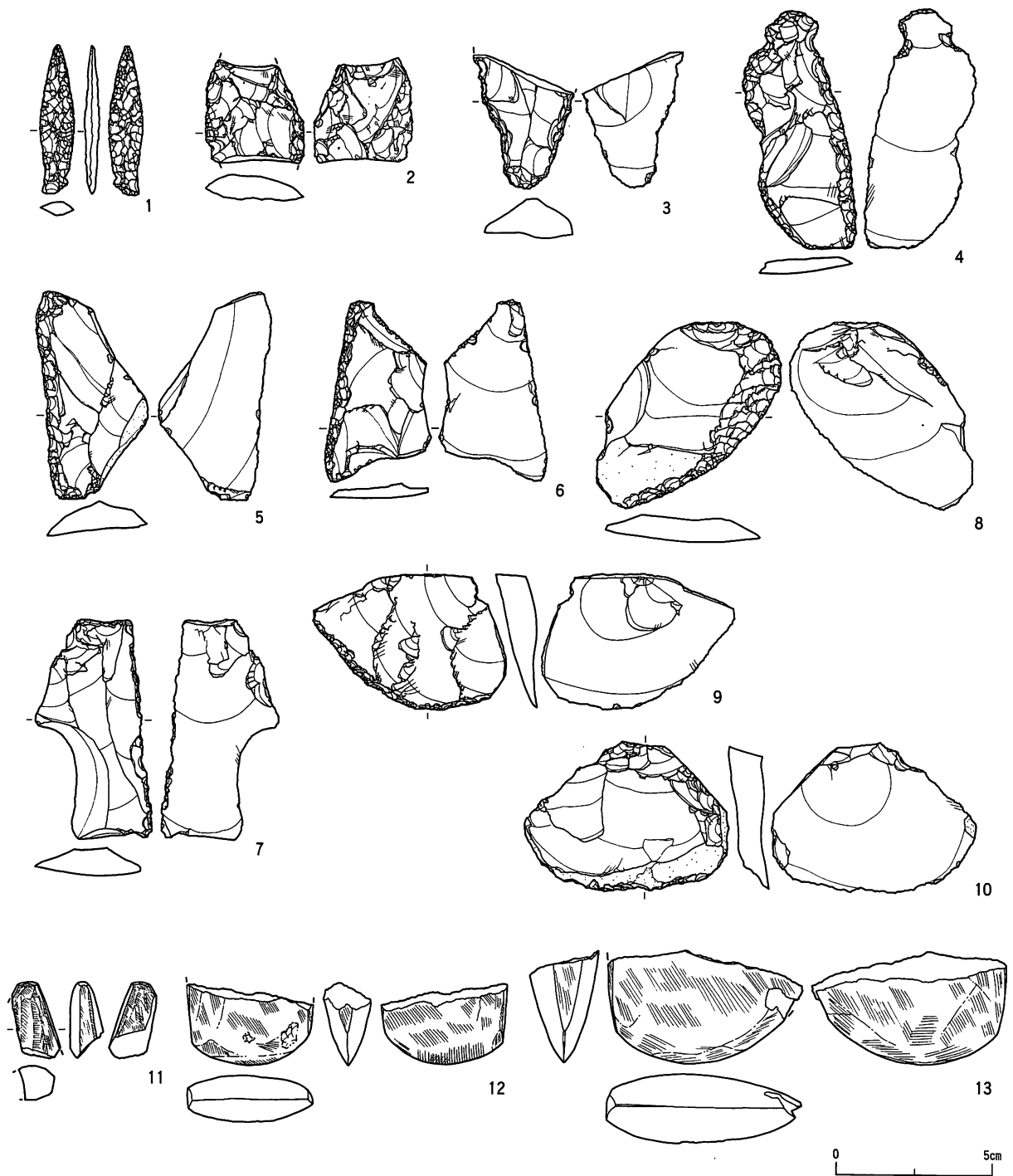
南西の沢跡から1点が出土した（図IV-9）。24は長軸両端に打ち欠きがあり、長軸方向の一側縁にも打ち欠きが加えられている。

砥石（図IV-6-25）

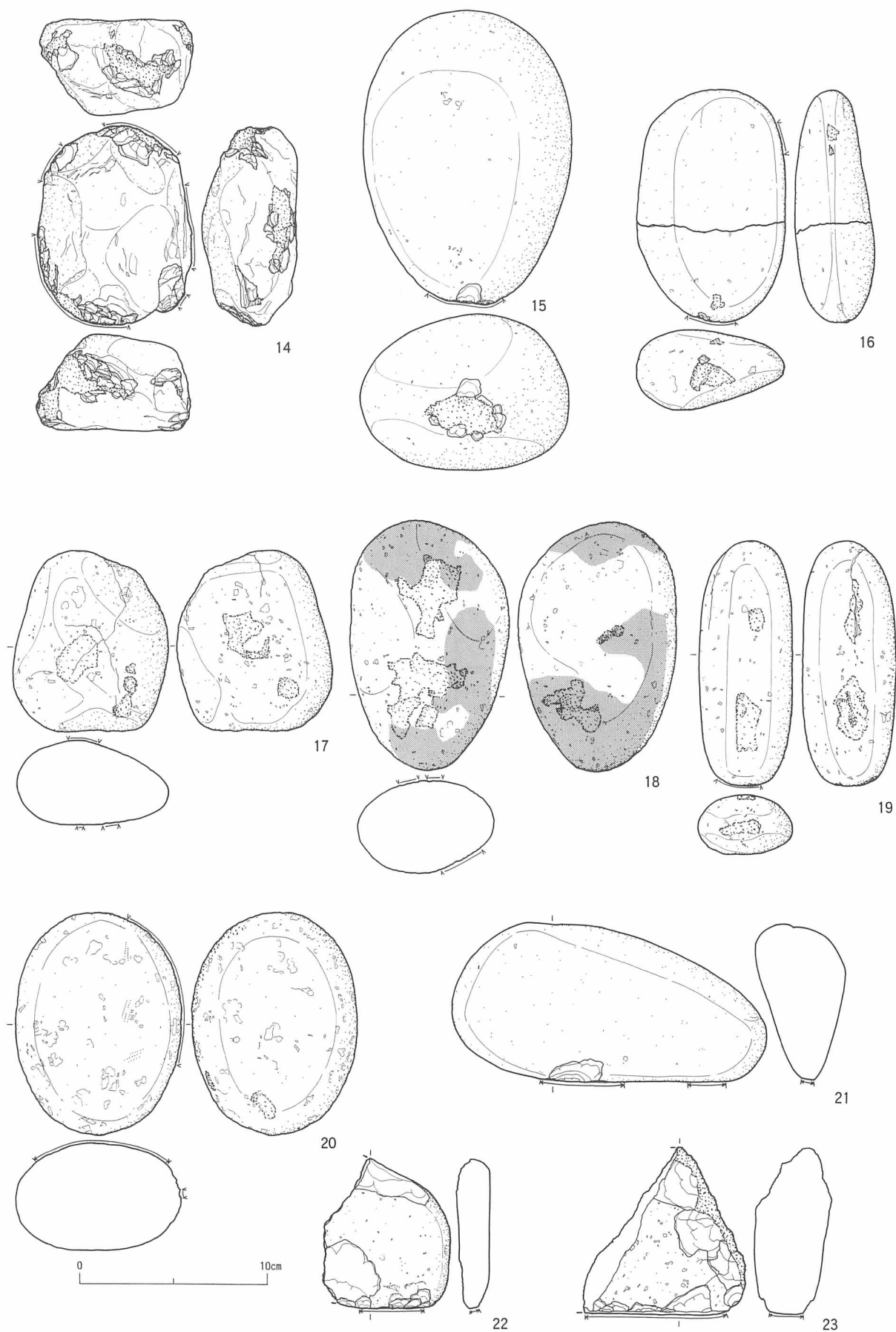
南西の沢跡から1点が出土した（図IV-9）。25は厚い板状のもので、使用面は一面である。一部に細い溝状の砥面がある。

石皿・台石（図IV-6-26、図IV-7-27）

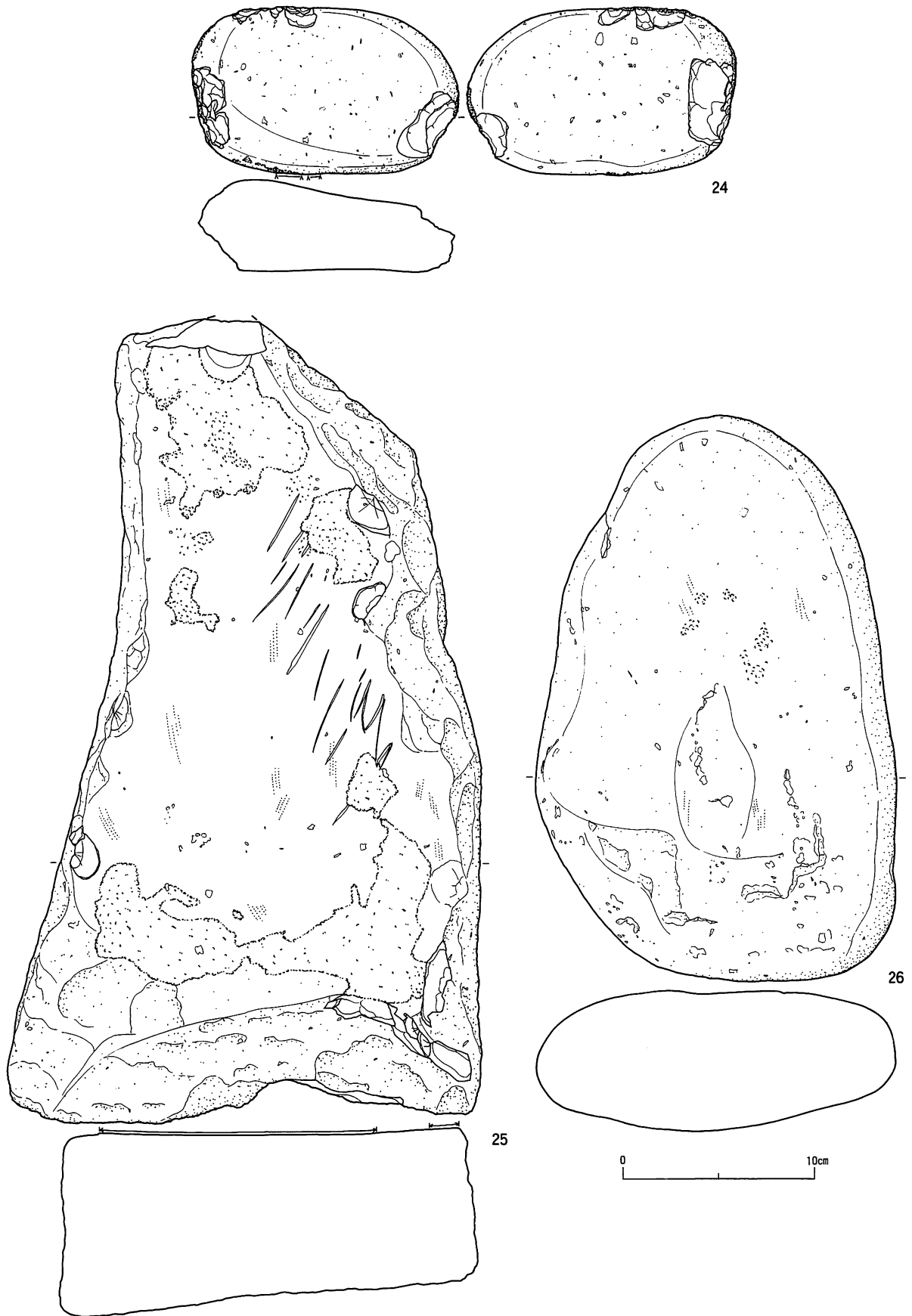
23点が出土したが、それらのうち19点は薄く割れた石皿・台石2個体分以上の破片（重さ15～800g）で、南西の沢跡に分布していた（図IV-9）。26は扁平な礫を素材としたもので、敲打痕が片面にわずかに認められる。27は両面ともくぼんでおり、敲打痕もみられる。



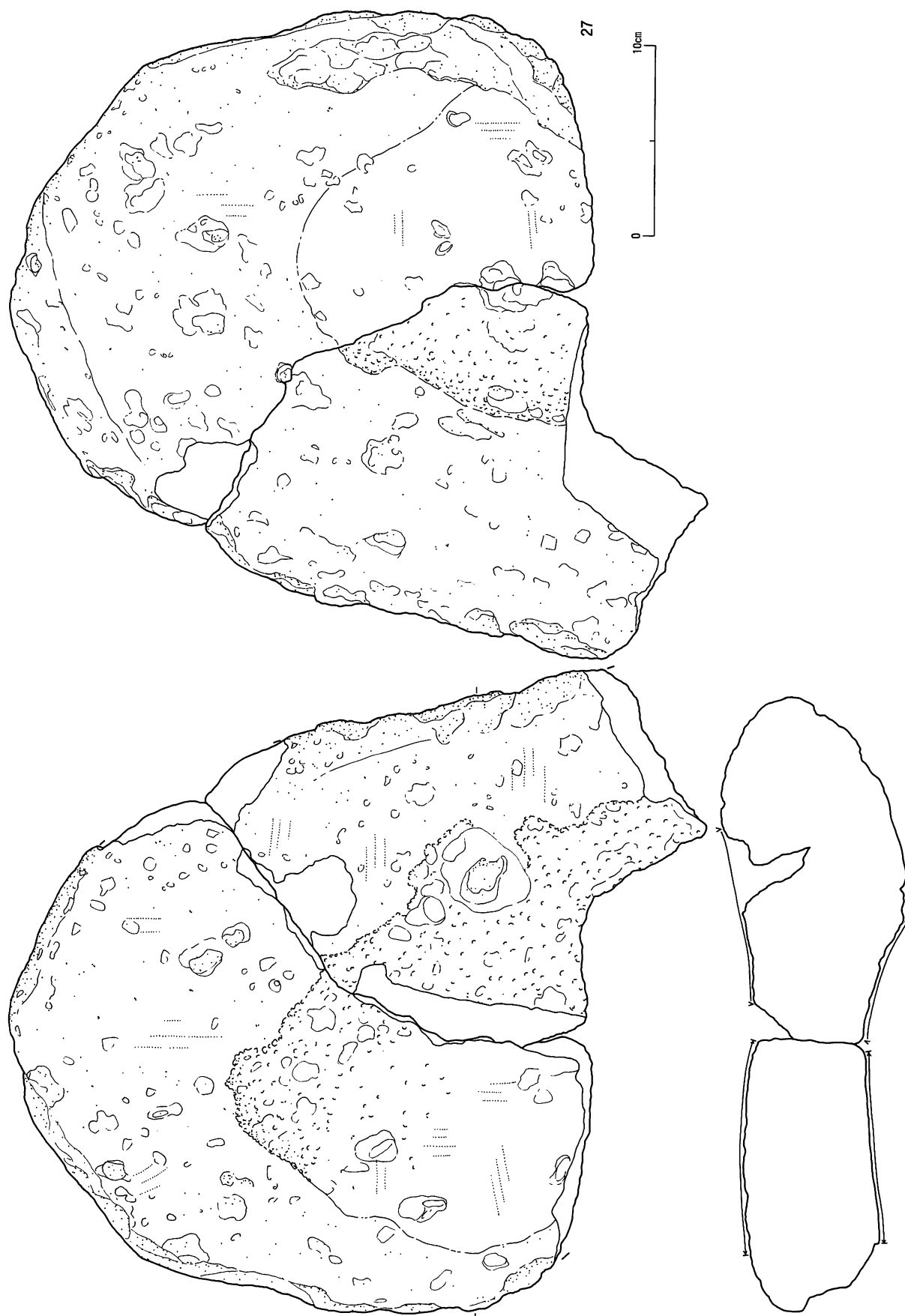
図IV-4 包含層出土の石器(1)



図IV-5 包含層出土の石器(2)



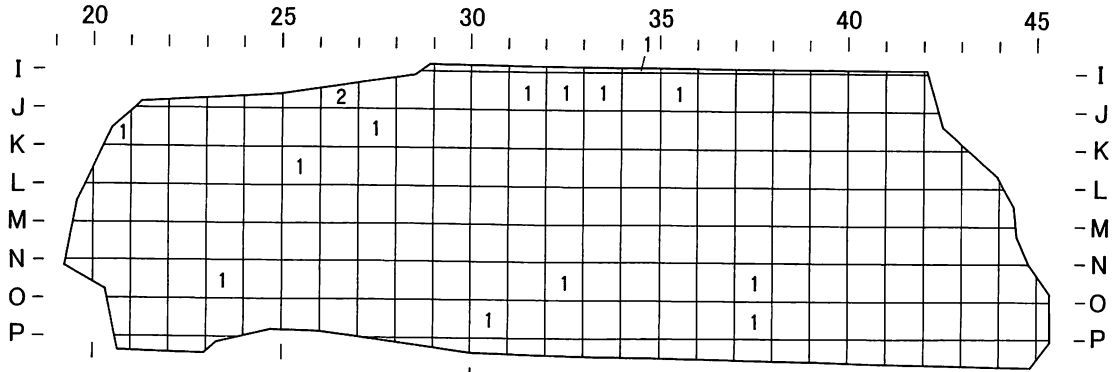
図IV-6 包含層出土の石器(3)



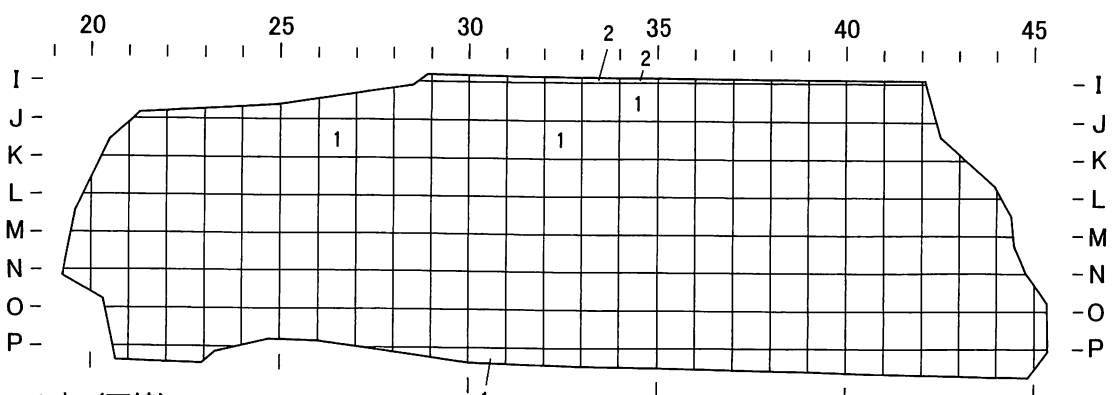
図IV-7 包含層出土の石器(4)



たたき石 15点

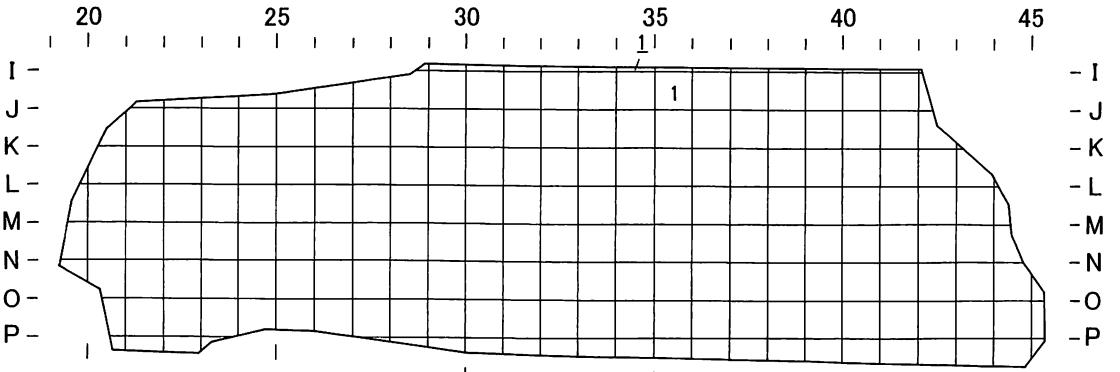


すり石 8点

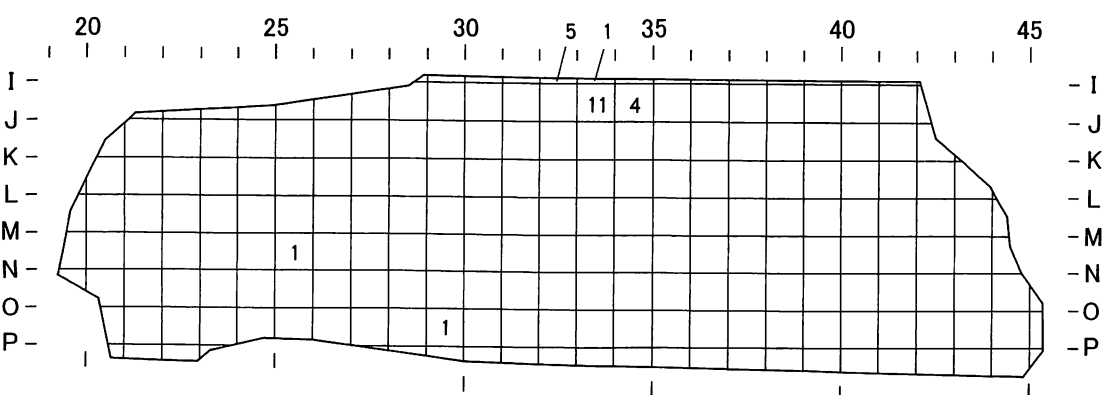


石錘 1点 (下線)

砥石 1点



石皿・台石 23点



図IV-9 包含層出土石器の分布(2)

表IV-1 包含層出土復原土器一覽

図番号	分類	大きさ (cm)			接合状況・層位	備考
		口径	底径	器高		
IV-1-3	Ⅲa	—	11.7	(37.9)	J-26-a・Ⅲ×1、J-26-b・Ⅲ×4、J-26-c・Ⅲ×24、J-27-b・Ⅲ×3、J-27-c・Ⅲ×3、K-26-d・Ⅲ×12、K-27-a・Ⅲ×8、K-27・Ⅲ×1、未注記×1 (以下、未接合の同一個体) I-27-a・Ⅲ×1、J-26-b・Ⅲ×8、J-26-c・Ⅲ×58、J-27-b・Ⅲ×8、J-27・Ⅲ×3、K-26-d・Ⅲ×34、K-27-a・Ⅲ×5、K-27・Ⅲ×2、発掘区不明×3、未注記×16	
IV-1-5	Ⅲb	24.6	—	(33.2)	H-32-b・Ⅲ×1、H-32-c・Ⅲ×1、H-34-b・Ⅲ×1、I-32-a・Ⅲ×7、I-32-c・Ⅲ×1、I-32-d・Ⅲ×14、I-33-c・Ⅲ×1、I-33-d・Ⅲ×2、I-34-a・Ⅲ×16、I-34-d・Ⅲ×2、J-32-d・Ⅲ×2 (以下、未接合の同一個体) H-32-c・Ⅲ×9、H-36-c・Ⅲ×1、I-32-a・Ⅲ×3、I-32-d・Ⅲ×16、I-32-d・風倒×1、I-33-a・Ⅲ×4、I-34-d・Ⅲ×1、I-34-d・Ⅲ×8、J-32-d・Ⅲ×1、J-32-d・Ⅲ×2	

表IV-2 包含層出土拓本掲載土器一覽

図番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	備考
図IV-1-1	J-26-c	7	Ⅲ	Ⅱb	
2	K-42-a・b	3	"	Ⅲa	
4	N-24-d、O-25-a、O-27-a	4、4、1	風倒、Ⅲ、攪乱	Ⅲb	
6	J-27-a	3	Ⅲ	"	
7	O-25-d	1	"	"	
8	I-31-d	1・2	"	"	
9	J-27-b	1	"	"	
10	L-25-c	4	"	"	
11	H-33-b	2・4	"	"	
12	H-32-c、H-33-b	10、4	"	"	
13	L-44-b	1	"	Ⅳa	
14	L-22-a	1	"	"	
15	N-44-b	1	"	"	
16	L-42-c	1・5	Ⅲ上面、Ⅲ	"	
17	J-27-a・d	1、1	Ⅲ	V	
18	J-27-d	1	"	"	
19	K-25-c、L-25-d	1、2	"	Ⅶ	

IV 包含層出土の遺物

表IV-3 包含層出土掲載石器一覧

図番号	名称	発掘区	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
IV-4-1	石鏃	J-22-b	1	Ⅲ	4.7	1.1	0.5	1.9	頁岩
2	ポイント・ナイフ	J-32-d	2	I	(3.3)	3.2	0.8	(11.2)	黒曜石
3	ポイント・ナイフ	I-33-a	5	Ⅲ	(4.3)	3.1	1.3	(11.5)	頁岩
4	つまみ付きナイフ	H-33-b	6	Ⅲ	7.6	3.7	0.4	13.6	"
5	スクレイパー	I-40-a	1	Ⅲ	6.6	3.6	0.9	20.8	"
6	スクレイパー	K-21-c	1	Ⅲ	5.7	3.4	0.4	8.9	"
7	スクレイパー	L-25-c	2	Ⅲ	7.0	3.7	0.9	18.8	流紋岩?
8	スクレイパー	M-26-c	1	Ⅲ	6.0	5.8	0.8	28.4	珪質頁岩
9	スクレイパー	L-22-c	1	Ⅲ	4.3	6.2	1.0	24.3	頁岩
10	スクレイパー	N-25-c	3	Ⅲ	4.7	6.5	1.1	33.0	流紋岩
11	石斧	O-29-b	1	Ⅲ	(2.4)	(1.5)	1.1	(3.8)	泥岩
12	石斧	I-40-c	1	Ⅲ	(2.6)	4.0	1.5	(17.1)	"
13	石斧	J-41-a	1	Ⅲ	(3.6)	6.2	2.2	(51.1)	"
IV-5-14	たたき石	I-32-d	12	Ⅲ	10.6	8.2	5.1	600	"
15	たたき石	I-33-a	11	Ⅲ	15.6	11.1	8.3	1,940	安山岩
16	たたき石	K-25-d	1	Ⅲ	12.3	8.0	4.3	540	"
17	たたき石	J-20	1	I	9.6	8.3	4.5	420	"
18	たたき石	H-34-b	4	Ⅲ	13.3	8.4	4.9	740	"
19	たたき石	O-30-b	1	Ⅲ	13.0	5.0	3.1	320	"
20	すり石	H-34-b	2	Ⅲ	11.7	8.8	5.7	780	"
21	すり石	J-26-b	4	Ⅲ	8.5	16.7	4.7	860	"
22	すり石	I-34-d	6	Ⅲ	(8.0)	(6.7)	1.8	(140)	"
23	すり石	H-33-b	5	Ⅲ	(8.9)	(8.6)	3.9	(280)	"
IV-6-24	石錘	H-34-d	1	Ⅲ	8.7	13.9	4.7	780	"
25	砥石	I-35-a	1	Ⅲ	41.8	24.7	9.5	8,700	砂岩
26	石皿・台石	M-25-b	1	Ⅲ	29.5	18.8	7.3	850	安山岩
IV-7-27	石皿・台石	H-32-c	6外	Ⅲ	(36.7)	34.0	9.0	(9,150)	"

V まとめ

1 遺構について

本遺跡は農地の造成や土取りによって包含層の削平された部分が多く、また、黒色土の残存する発掘区でも遺物の出土点数はわずかなものが大半だった。遺構は土壇3基が検出されている。

P-1は発掘区南西の浅い沢跡からV層上面で確認されたものである。遺構の周囲10mほどの範囲では、Ⅲ層中にノダップⅡ式土器(図Ⅳ-1-5)やたたき石(図Ⅳ-5-14・15・18)、すり石(図Ⅳ-5-20・22・23)、石錘(図Ⅳ-6-24)、石皿・台石(図Ⅳ-7-27)等の礫石器が散在しており、これらを用いて食物の加工や調理に関する作業が行われていたと考えられる。ただし、18のように焼けた可能性のあるたたき石や、図示しなかったが薄く割れた石皿・台石2個体分以上の破片が出土したことは、P-1との関連から注意したい点である。

P-2の覆土からはたたき石や石皿・台石が出土している。鳴川右岸遺跡(七飯町)で土壇B類と分類された遺構の一部には、規模や平面形がこれに類似し、覆土や底面から礫・礫石器がまとめて検出されたものがあり、報告書ではサイベ沢Ⅶ式の頃を中心として構築されたと述べられている(道埋文編 1994)。P-2の周辺から土器はほとんど出土していないが、鳴川右岸遺跡の例や本遺跡の主体となる土器の時期が縄文中期前葉・後葉であることから類推すれば、中期の遺構とみなしてよいかもかもしれない。

P-3は長軸が約2.5mと大型だが、炉や柱穴が確認されなかったことから土壇に分類した。覆土下位からはほぼ完形の円筒土器上層b式の土器が横倒しの状態で検出されている(図Ⅲ-4-1)。これに類似した事例には、時期は下るが、野田生2遺跡(八雲町)で竪穴住居跡H-6の床面から横倒しになって出土したサイベ沢Ⅶ式新段階の土器をあげることができる(道埋文編 2002c)。

P-1、P-3の覆土は埋め戻しが想定される汚れた土であり、P-2やP-3の遺物の出土状態を加味すると、本遺跡で検出された土壇は3基とも墓の可能性が考えられる。渡島半島では縄文後期前葉に墓域が集落から切り離されて独立した空間として形成される(南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会編 1999)が、本遺跡の遺構が墓だとすれば、その前段階にあたる、日常生活を行う場と墓域の分離が徐々に進行する状況をうかがわせるものといえよう。

2 土器について

P-3の覆土下位から出土した土器(図Ⅲ-4-1)は無文地の口縁から胴部上位にかけて貼付帯が施されている。それらは①口唇直下にめぐる波状のもの、②突起の間をつなぐ弧線状のもの、③2本一組で突起の下位に施された縦位のもの、④2本一組で横位に施され、文様帯を区画するものから構成されており、円筒土器上層b式の中でも新しい様相をもつと考えられる。この頃の土器は、本遺跡の周辺では栄浜1遺跡(八雲町)で竪穴住居跡の覆土や包含層から出土している(三浦・柴田 1987、三浦 1998ほか)。

P-1の周辺から出土した土器(図Ⅳ-1-5)は頸部のくびれが弱く、胴部最大径付近に粘土紐を貼付してなでつけを行った後に縄文を施し、貼付帯上や側縁に縄線文が加えられたもので、貼付帯の上に縄文は施されていない。口唇や内面はみがかれている。頸部のくびれがゆるやかになり、それに伴って貼付帯の位置が下がるのは、大木9式に相当する土器の器形から影響を受けて、くびれよりも肩部が意識されたことによるものであろう(註1)。縄文を施した後に粘土紐の貼り付けを行う大

安在B式の施文の手法とは順序が逆転して、粘土紐を貼り付けた後に縄文を施す手法は、本遺跡の土器に後続する、貼り付けがさらに薄くなり、隆帯化したものや、さらに中期末葉の煉瓦台式にまで引き継がれている。

縄文中期後半の大規模な集落跡が調査された大船遺跡（南茅部町）の報告書では、住居の形態を時間の経過に沿って5つのタイプに分けて各形態に伴う土器を整理し（註2）、榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式をそれぞれ2段階、3段階、2段階に細分している（坪井 1998）。これに従えば、本遺跡から出土した土器は大安在B式の第三段階（坪井 1998）に位置付けられる。しかし、漸移的ではあるが器形や施文の順序（註3）に変化がみられることや、縄線や貼付帯による、口縁部から頸部にかけての鋸歯状や方形の区画などで構成された文様帯がきわめて簡素化していることから判断すると、本遺跡の資料を含めてこれらはノダップⅡ式の古い段階に属すると考えた方がよいのではないだろうか（山田 2001）。この頃までに口縁は平縁のものが主になり、口唇に縄文の施されることもなくなるようである。

本遺跡の土器と同じ頃のものやそれに後続すると考えられるノダップⅡ式の資料は、森町内では御幸町遺跡（藤田 1985）の竪穴住居跡、八雲町内ではコタン温泉遺跡（三浦・柴田 1992）の第3貝塚等から出土している。前者では薄い貼付帯上に短刻線や円形刺突文のええられたものがみられるが、貼り付けがなくなって短刻線が地の縄文の上に直接施されたものはほとんど出土していないようである。

註 1 熊谷仁志氏のご教示による。

2 大船遺跡の復原土器には竪穴住居の床面直上から一括して検出されたもののほかに、住居の廃棄後に堆積した覆土中の人為堆積層から出土したものも多いが、廃棄から窪みの利用までにどれほどの時間が経過しているのかは報告書の記載では必ずしも明確ではない。住居の形態の変化と、人為堆積層や床面直上でそれぞれ一括して出土した土器の器形・文様等の変化がどのように対応するのかは、今後もさらに検討を深めていくべきだろう。

3 施文の順序の逆転は、大船遺跡では大安在B式の第二段階の新しいタイプの頃から生じているようである（竪穴住居H-47出土の土器など、阿部・坪井 1998）。

引用・参考文献

- 阿部千春・福田裕二・輪島慎二 2002 『大船C遺跡 ハマナス野遺跡vol. XVII』 南茅部町教育委員会
阿部千春・坪井睦美 1998 『大船C遺跡』 南茅部町教育委員会
石川政治 1963 「函館市天祐寺貝塚」『石器時代』第6号
石本省三・横山英介ほか 1999 『桜町6遺跡・桜町7遺跡発掘調査報告書』 七飯町教育委員会
石本省三 1986 『七飯本町1・2遺跡』 七飯町教育委員会
及川研一郎 1987 「北海道・八雲町落部遺跡出土土器の編年的位置」『溯航』第15号
大沼忠春ほか 1976 『元和』 乙部町教育委員会
大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻第4号
大沼忠春 1989 「北筒式土器様式」『縄文土器大観』1 草創期・早期・前期 小学館
大沼忠春 2001 「北海道における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』 縄文時代文化研究会
小笠原忠久 1985 『白尻B遺跡vol. V』 南茅部町教育委員会
小笠原忠久 1986 『白尻B遺跡vol. VI』 南茅部町教育委員会
熊野喜蔵・八木光則 1974 「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器群」『北海道考古学』第10輯
倉谷泰賢・小笠原忠久 1972 『大安在B遺跡』 上ノ国町教育委員会
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1986 『木古内町建川1・新道4遺跡』北埋調報33
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1987 『木古内町建川2・新道4遺跡』北埋調報43
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1988 a 『函館市石川1遺跡』北埋調報45
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1988 b 『函館市桔梗2遺跡』北埋調報46
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1988 c 『木古内町新道4遺跡』北埋調報52
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1994 『七飯町鳴川右岸遺跡』北埋調報87
（財）北海道埋蔵文化財センター編 1997 『七飯町鳴川右岸遺跡・桜町遺跡』北埋調報112
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2000 『長万部町花岡2遺跡・花岡3遺跡』北埋調報139
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2001 a 『八雲町黒岩3遺跡・ポンシラリカ1遺跡』北埋調報155
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2001 b 『八雲町山崎4遺跡』北埋調報162
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2001 c 『八雲町山越2遺跡』北埋調報163
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2002 a 『八雲町山崎5遺跡』北埋調報165
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2002 b 『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』北埋調報166
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2002 c 『八雲町野田生2遺跡』北埋調報167
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2002 d 『八雲町野田生4遺跡』北埋調報171
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2002 e 『八雲町栄浜1遺跡』北埋調報175
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2002 f 『調査年報14 平成13年度』
（財）北海道埋蔵文化財センター編 2003 『八雲町落部1遺跡』北埋調報181
桜井清彦 1961 「北海道山越郡落部遺跡」『日本考古学年報』12
桜井清彦 1964 「北海道山越郡オトシベ遺跡」『日本考古学年報』15
佐々木利和編・山田秀三監修 1988 『アイヌ語地名資料集成』 草風館
佐藤忠雄編 1979 『鳥崎遺跡』 森町教育委員会
佐藤 稔ほか 2001 『オバルベツ2遺跡(1)』『長万部町埋蔵文化財調査報告』6 長万部町教育委員会
柴田信一 1995 『栄浜1遺跡』 八雲町教育委員会
菅江真澄著 内田武志・宮本常一編 1971 『菅江真澄全集』第2巻 日記2 未来社
鈴木克彦 1999 「北海道渡島・桧山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学』第35輯
高橋正勝・小笠原忠久 1980 「4 縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』 みやま書房
高橋正勝 1972 「北海道における縄文時代中期の終末」(1)(2)『北海道青年人類科学研究会会誌』No.9・10
高橋正勝 1981 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣出版
竹内理三編 1987 『角川日本地名大辞典』1 北海道 下巻 角川書店

- 田原良信・野辺地初雄 1989 『陣川町遺跡』 函館市教育委員会
- 坪井睦美 1998 「土器」『大船C遺跡』 南茅部町教育委員会
- 鍋島直久 1991 『ハマナス野Vol. XⅢ』 南茅部町教育委員会
- 藤島一巳編 1989 『江差町 茂尻C遺跡』 江差町教育委員会
- 藤田 登・荻野幸男編 2002 『鷲ノ木4遺跡・栗ヶ丘1遺跡発掘調査概要報告書』 森町教育委員会
- 藤田 登 1985 『御幸町』 森町教育委員会
- 藤田 登 1994 『御幸町2』 森町教育委員会
- 舟山直治 2002 「菅江真澄がみた和入地と蝦夷地」北海道開拓記念館編『第54回特別展 描かれた北海道－18・19世紀の絵画が伝えた北のイメージ図録』(社)北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会
- 古屋敷則雄編 2001 『高屋敷川1遺跡』 戸井町教育委員会
- 北海道土木部河川課監修 1970 『北海道河川一覧』(社)北海道土木協会
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』 東京大学出版会
- 松浦武四郎著 高倉新一郎編 1978 『竹四郎廻浦日記』上・下 北海道出版企画センター
- 松浦武四郎著 秋葉 実解説 1988 『武四郎蝦夷地紀行』 北海道出版企画センター
- 松岡達郎・横山英介 1979 『白尻B遺跡発掘調査報告』 南茅部町教育委員会
- 松下 亘編 1974 『西股』 北海道第四紀研究会
- 三浦孝一 1983 『栄浜』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1984 「第二編 先史時代」『改訂八雲町史 上巻』 八雲町役場
- 三浦孝一 1987 『台の上遺跡』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1998 『栄浜1遺跡Ⅳ』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1986 『栄浜1遺跡』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1987 『栄浜1遺跡』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1992 『コタン温泉遺跡』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1995 『浜松5遺跡』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1997 『大新遺跡Ⅰ』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998 a 『大新遺跡Ⅱ』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998 b 『旭丘1遺跡』 八雲町教育委員会
- 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会編 1999
『南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム発表要旨－北日本における縄文時代の墓制－』
- 南北海道考古学情報交換会 2002 『第23回考古学情報交換会資料集・渡島半島における縄文時代中期末葉から後期初頭の土器様相』
- 峰山 巖・大島直行ほか 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡 上磯郡知内町湯の里1遺跡発掘調査報告書』 知内町教育委員会
- 宮 宏明 1981 「ノダップⅡ式土器の検討」『考古学研究』第28巻第3号
- 村上義直・乾 哲也 1996 『長浜2遺跡』 奥尻町教育委員会
- 森町教育委員会 1977 『森町オニウシ遺跡発掘調査報告』 森町教育委員会
- 森町教育委員会 1982 『森川A遺跡』 森町教育委員会
- 森町編 1980 『森町史』 森町
- 山田 央 2001 「北海道南西部における縄文時代中期末葉の土器について」『渡島半島の考古学』 南北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会
- 山田秀三 1972 『北海道の川の名』増補版 モレウ・ライブラリー
- 山田秀三 1984 『北海道の地名』 北海道新聞社
- 吉崎昌一 1965 「縄文文化の発展と地域性 北海道」『日本の考古学』Ⅱ縄文時代 河出書房



1 遺跡遠景（東から）



2 沢跡調査状況（西から）



3 南西の沢跡調査状況（南東から）

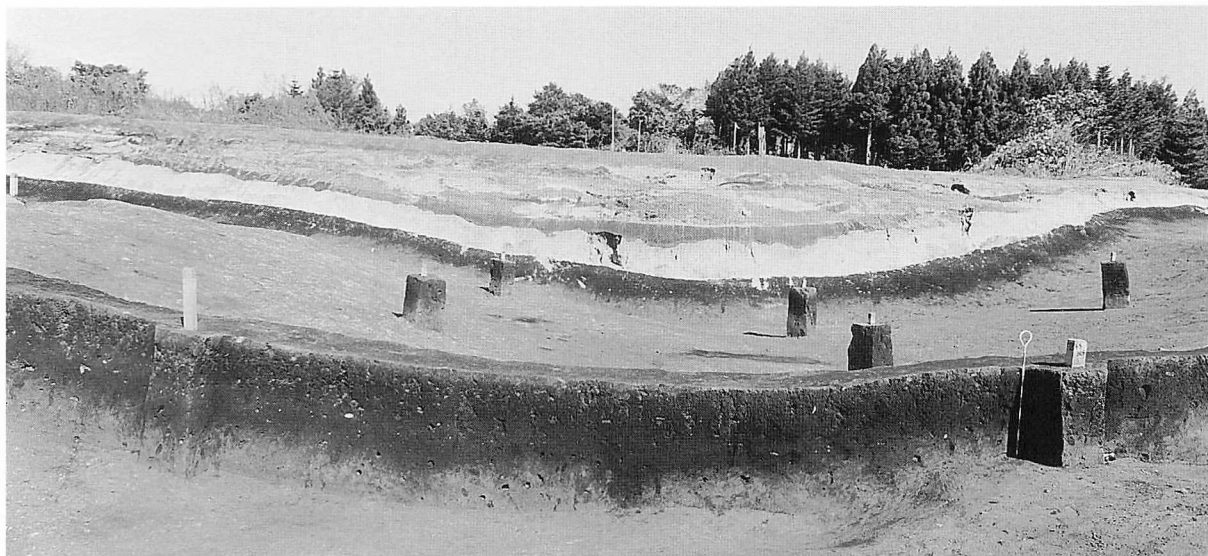
図版 2



1 南側の沢跡検出状況（西から）



2 25ライン以南の調査状況（北から）



1 基本土層（南西から）

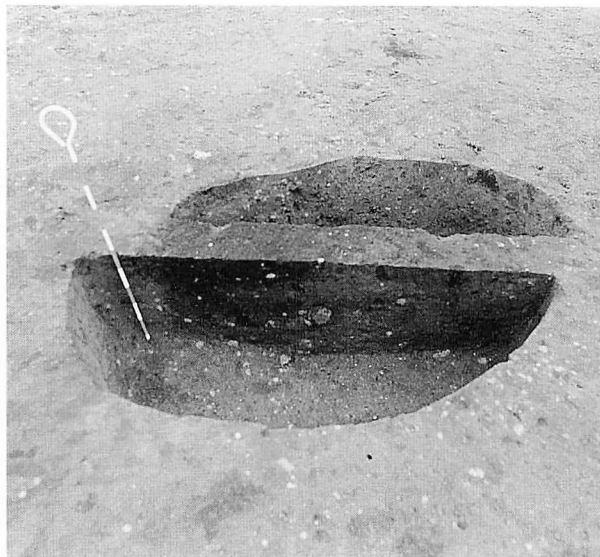


2 南側調査終了状況（西から）

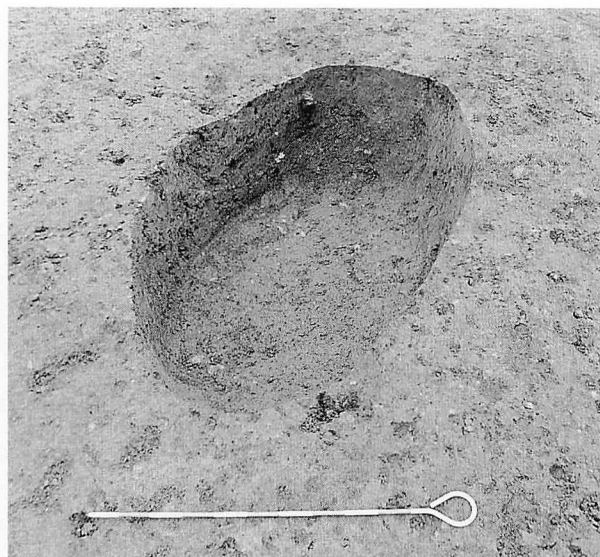


3 北側調査終了状況（東から）

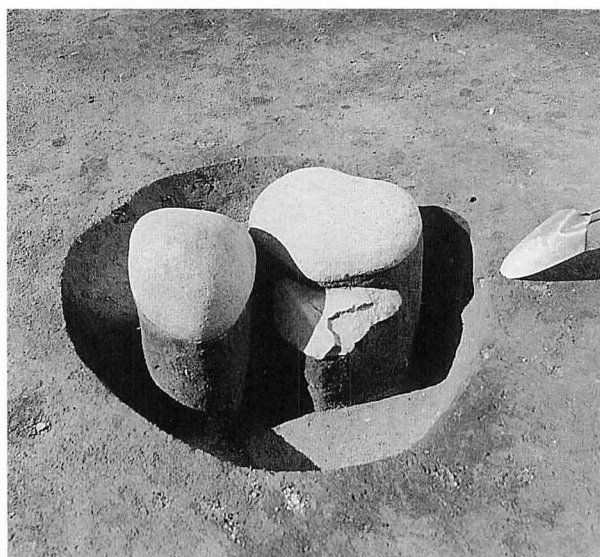
図版 4



1 P-1 土層断面 (北から)



2 P-1 (南から)



3 P-2 遺物出土状況 (東から)



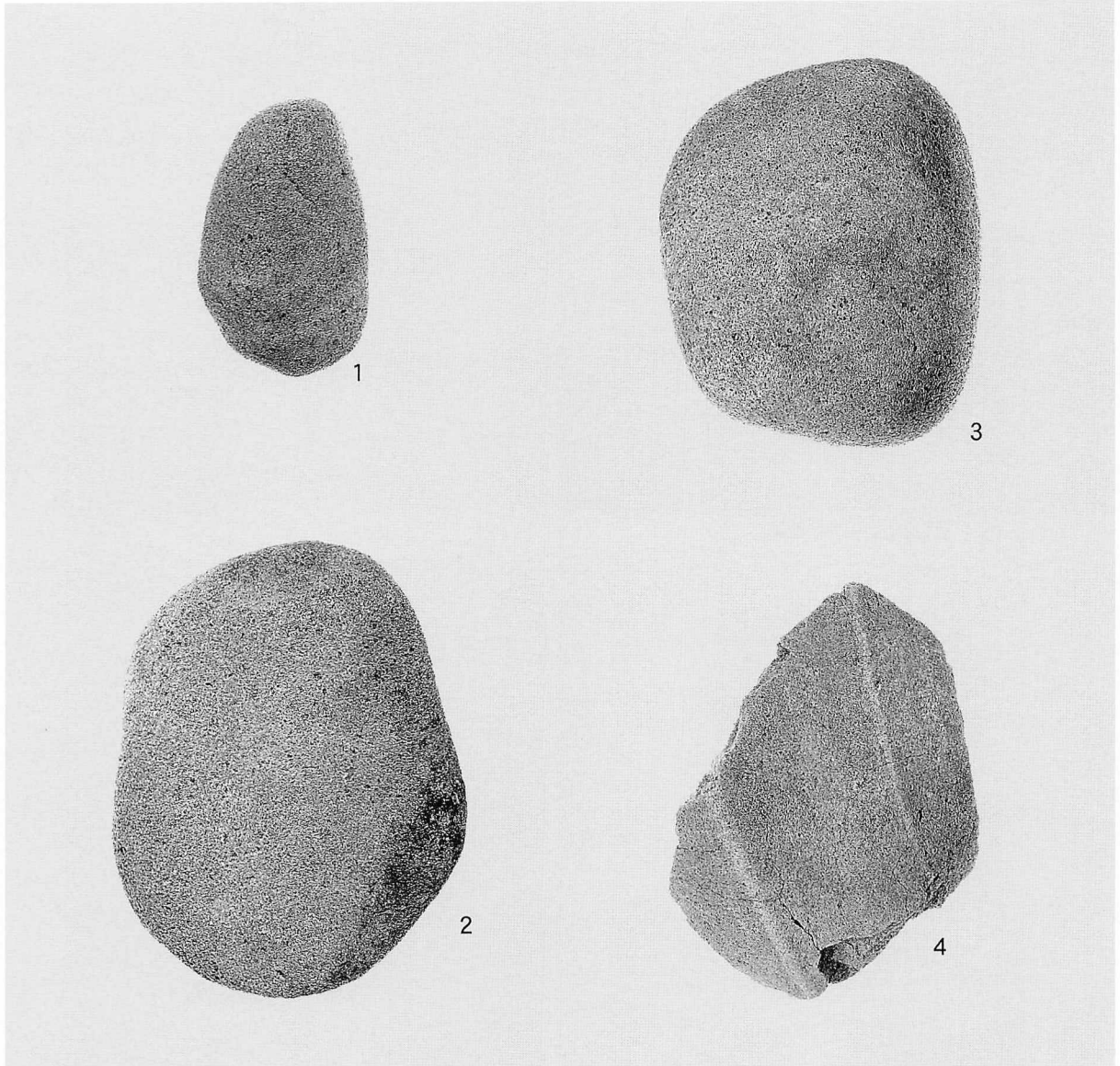
4 P-2 (東から)



5 P-3 (西から)



6 P-3 遺物出土状況 (南西から)

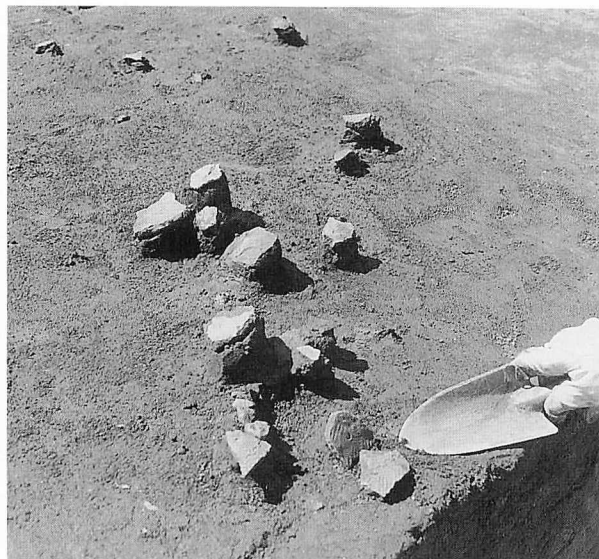


1 P-2 出土の石器 (図Ⅲ-2)



2 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-4-1)

図版 6



1 J-26 遺物出土状況（東から）



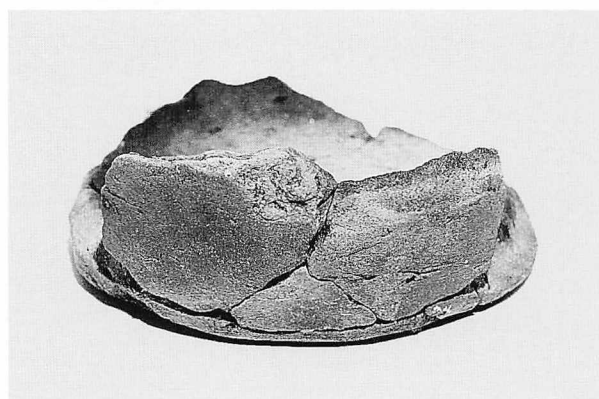
4 H-33 · I-33 遺物出土状況（南西から）



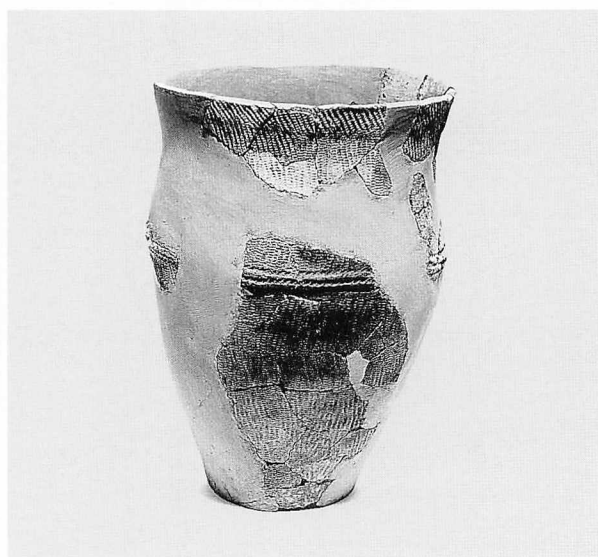
2 包含層出土の土器（図IV-1-3 胴部）



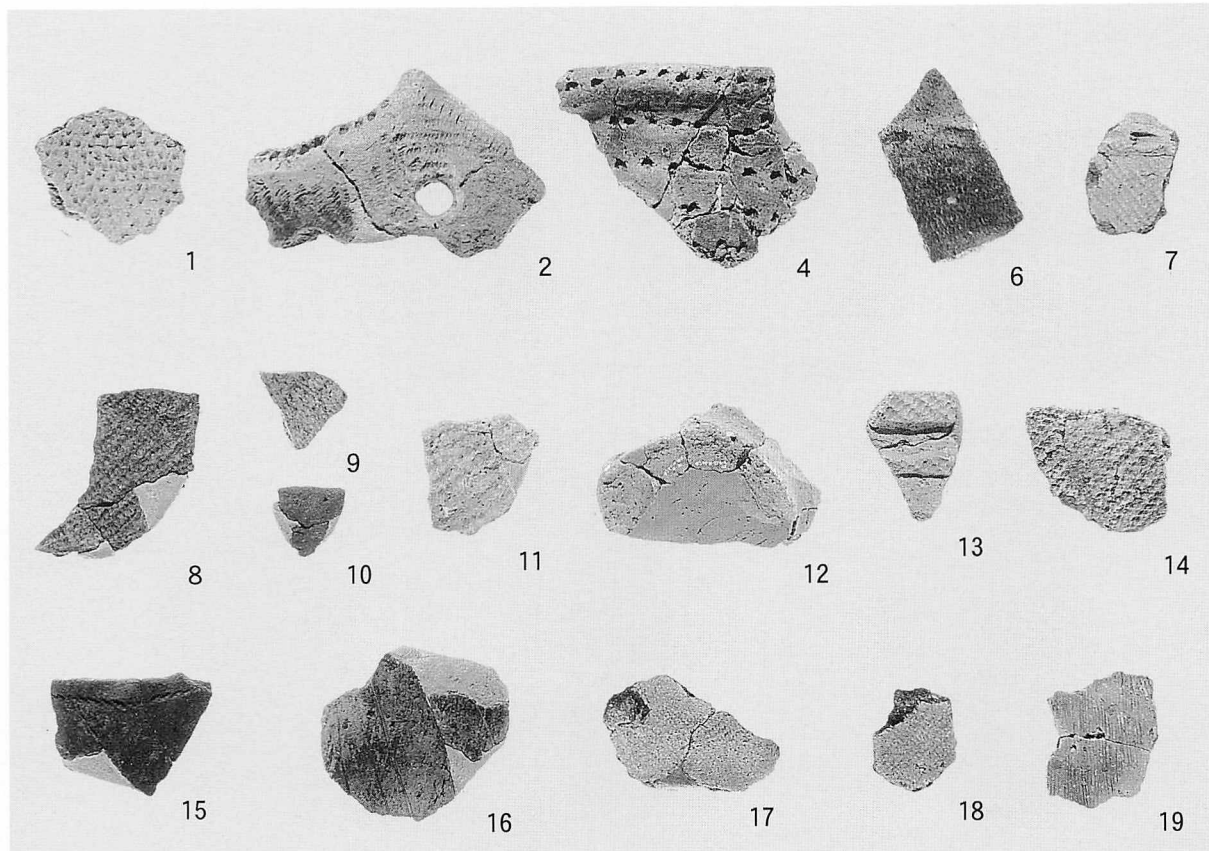
5 I-34 遺物出土状況（東から）



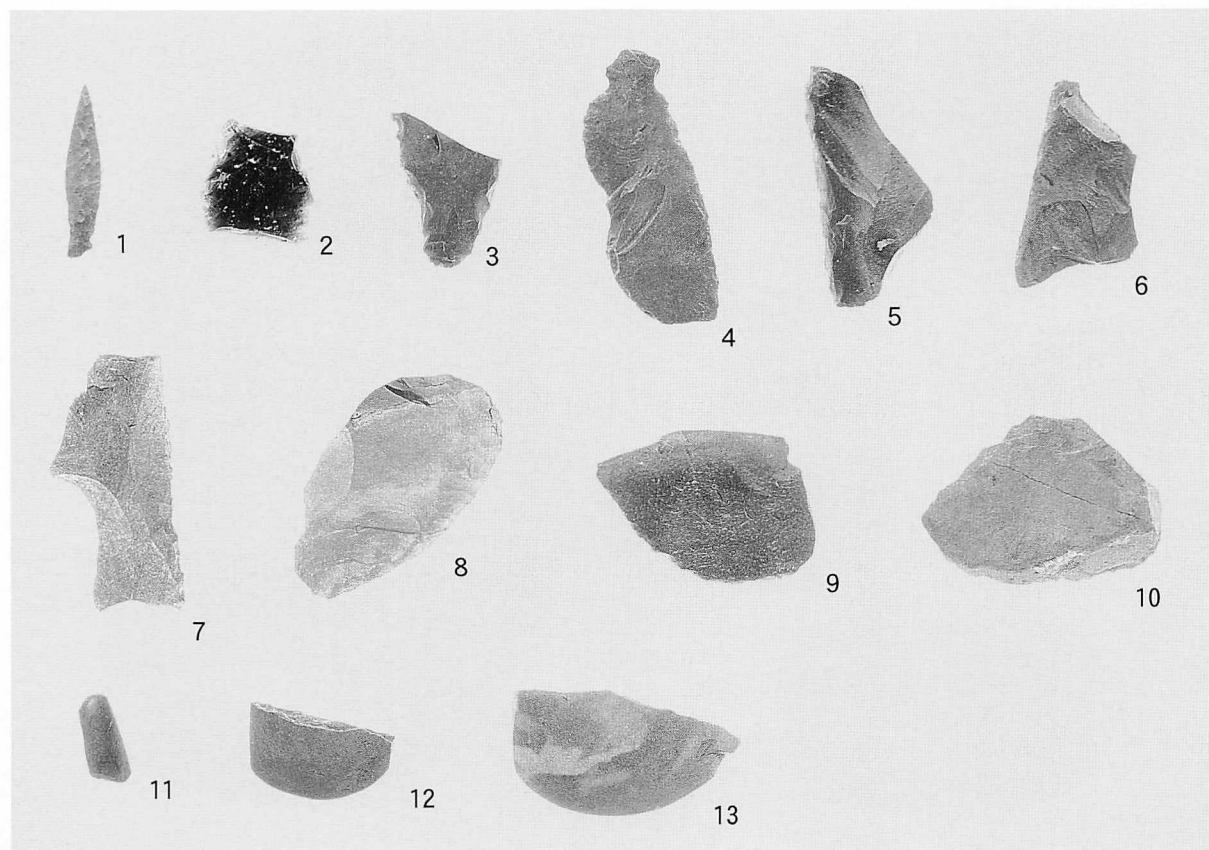
3 包含層出土の土器（図IV-1-3 底部）



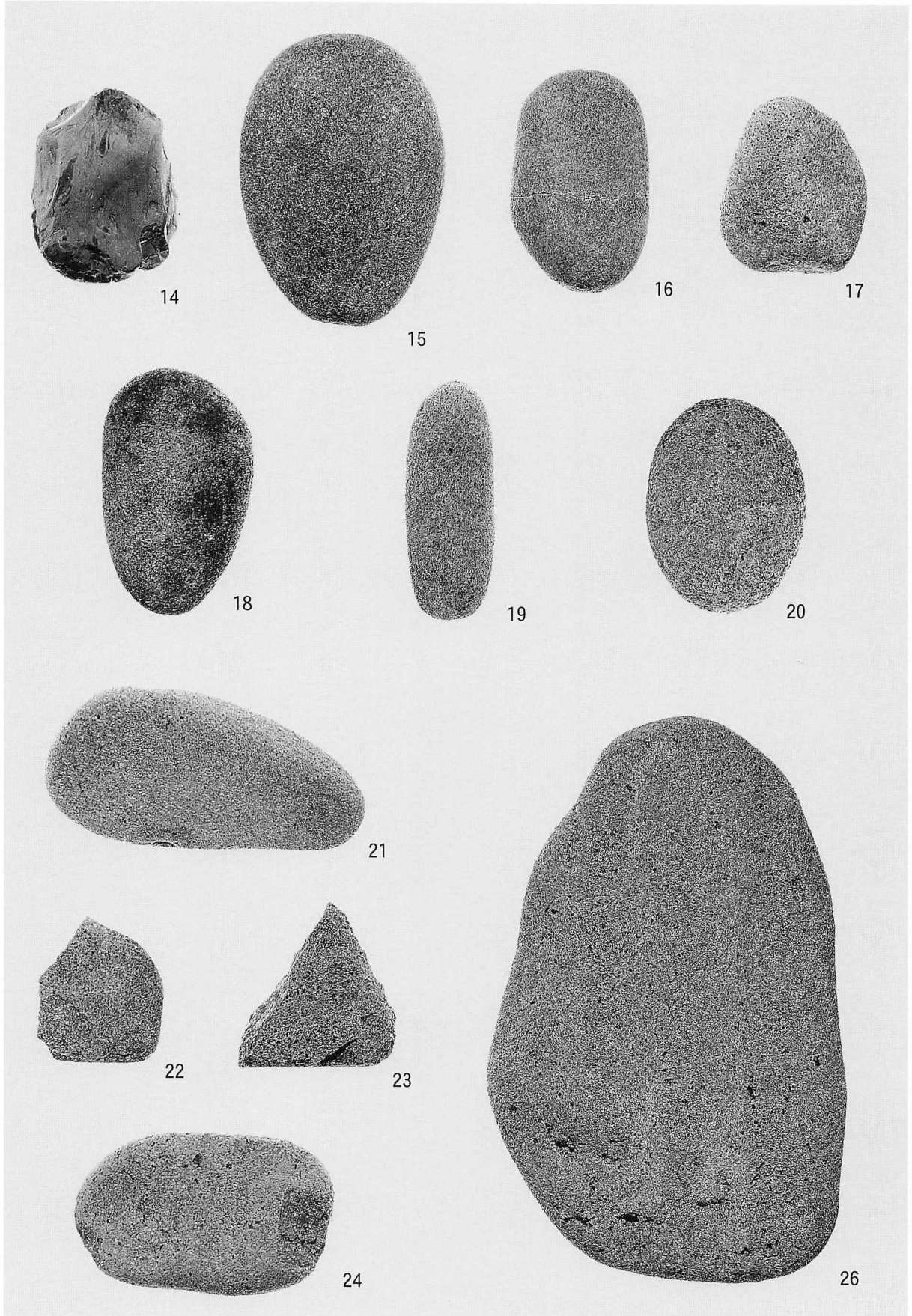
6 包含層出土の土器（図IV-1-5）



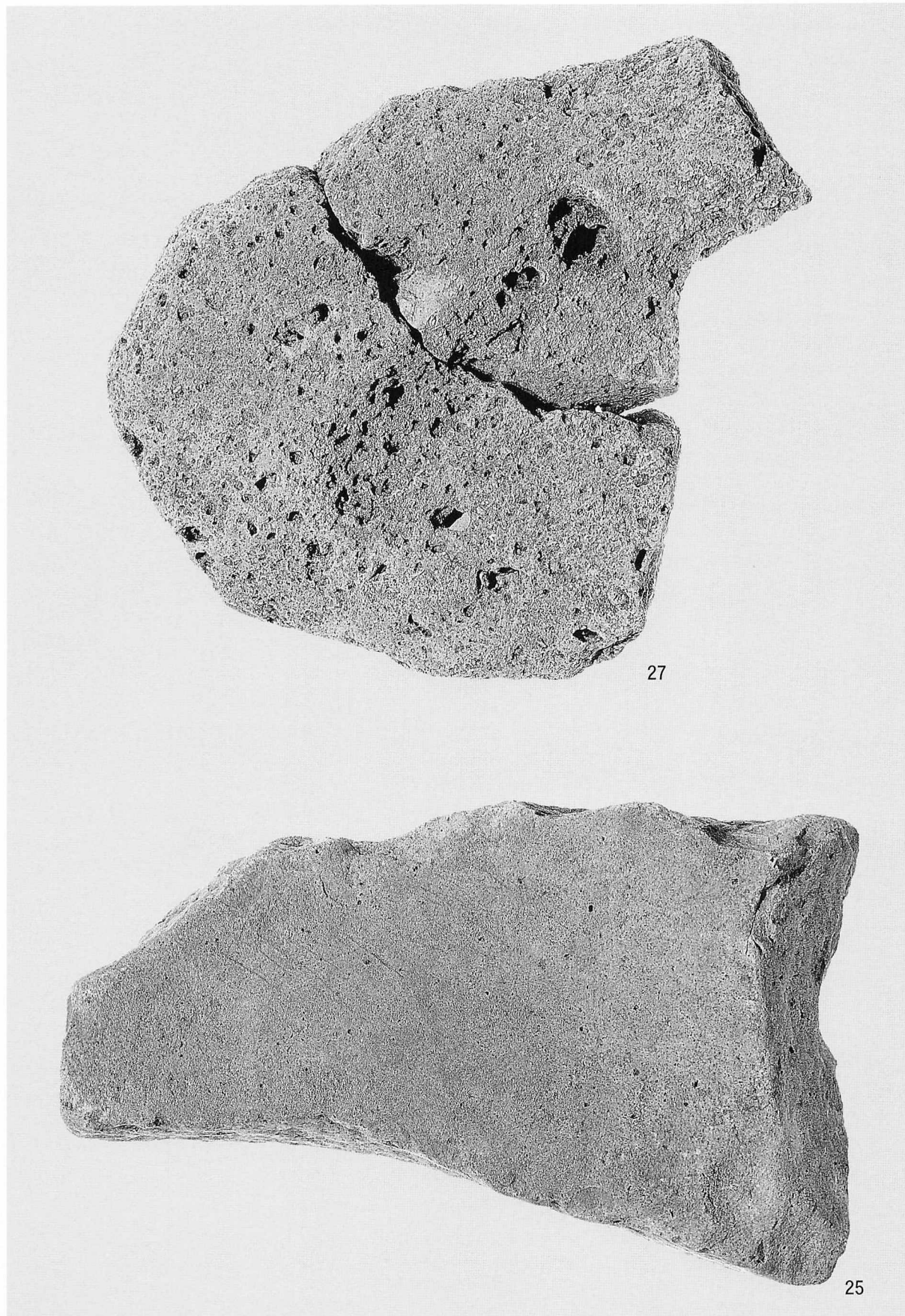
1 包含層出土の土器 (図IV-1)



2 包含層出土の石器(1) (図IV-4)



1 包含層出土の石器(2) (図IV-5・6)



1 包含層出土の石器(3) (図IV-6・7)

報告書抄録

ふりがな	もりまちぼんないがわうがんにせき							
書名	森町本内川右岸遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第182集							
編著者名	中田裕香							
編集機関	（財）北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1							
発行年月日	2003年2月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぼんないがわうがんにせき 本内川右岸遺跡	ほっかいどうかやべく 北海道茅部郡 もりまちあざいしぐら 森町字石倉 ちよう 町 610-7 ほか	01345	B-15-7	42° 10' 3"	140° 27' 30"	20010903 } 20011026	2,746㎡	高速道路 北海道縦 貫自動車 道建設工 事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
本内川右岸遺跡	遺物包含地	縄文時代中期 後期		土壇 3基		縄文土器 円筒土器上層b式 ノダップⅡ式 天祐寺式 ほか 石器等 石鏃、ポイント・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、石錘、砥石、石皿・台石		

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第182集

森町 本内川右岸遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成15年2月20日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp/>
E-mail mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社 総北海
〒078-8272 旭川市工業団地2条1丁目1-23
TEL (0166)36-5556 FAX (0166)36-5657
